國の親心とは違はなければならない。我々の子には神の魂が惠まれ、我々の子は畏くも陛下の赤子であるから、單なる本能的な親心の愛のみでは日本的な親心ではないのである。人の師として子供を愛する場合でも同樣である。其の基礎には尊信崇敬の心持が流れて居らねばならない。國家の爲には、陛下の赤子としての教へ子を一人でも粗末に取り扱ふことは出來ない。又多くの場合に於ては、我々は初めから教へ子を愛するといふことは容易なことではない。初めは教へ子を信ずべきである。これは餘り困難なことではない。たとへ二三回不幸にして教へ子に裏切られることがあつても、飽くまで信じてかゝれば遂には教へ子は我々を信ずるやうになる。裏切ることも止むであらう。御互の誠と誠とが通ずるからである。師弟の間が信を以て結合されなければ教育の實施は不可能である。

我々はまた教へ子を粗末に取扱はぬといふ態度、或る意味での敬の精神を以て教へ子に向ふべきである。教へ子は教師の敬の態度を以て心傳心に體得して自然に教師を敬ふやうになる。教師に國體に對する尊信崇敬の精神が溢れ、神人合一の敬虔の精神が充ちて居れば、これを通じて教へ子にも敬虔の精神が起り得るものである。斯くして師弟の間が共感信順の心境によりて融合する所に自然に漸次に高尚な愛や親しみが生ずるものであらうと思ふ。

要は我々は國體を尊信し崇敬し、これに對する堅い信念をもち、神人合一の純粹無雜の眞心を以て、敬虔な精神を以て、皇祖皇宗の大御心を服膺し實踐することを努めねばならない。この事は獨り師道精神のみではなく、苟くも日本臣民たるものゝ盡くすべき道である。併し師道には國民指導の重任が課せられて居るのであるから、この點に於て

模範的な先達的な修練を積まねばならない。素質として日本の神の魂を惠まれて居る教へ子のために沒我的獻身的に盡くす所の教育愛の精神は日本に於ては斯様な意味の嚴肅なる尊信崇敬の精神から、敬虔なる精神から起るべきである。

(二)創造的實踐の教育と師道の修練

國民學校の教育の一大特色は創造的實踐的の大國民を養成せねばならぬことになつて居るのであるから、師道に於ても此の點に於て充實せる修練が積まれねばならない。

高次の實行實踐は日本の國柄の本質である。日本の歴史の本質は皇國の道の實踐であらねばならない。日本の國民は觀念享樂の國民ではならない。又あつてはならない。知性の活動は大に必要である。

併し夫れは目的ではない。實踐への方法であり、實踐化され、技術化されねばならない。ゲーテは知性の働きは吸ふ息であり、行の方面は吐く息であり、二つは人間の呼吸のやうなもので、二つなくしては人は生きることが出來ないと言つたが、知と行とは車の兩輪、人間の呼吸のやうなものではあるが、この意味の知は勿論、行の方面も高次の行の方法的なものである。日本に於てはゲーテの言つて居る知と行とは高次の目的々實踐としての皇國の道の實踐に役立つ所の方法的なものである。我々は肇國の精神の本義に徹する時はこゝに目的々な高次の實行實踐の歴史を作らねばならない。其の爲には方法的な實踐も必要となるのである。

日本は他國の文化を攝取し同化したがこれは此を攝取し得るだけの自國文化の基本をもつて居るからである。此の文化は皇國の道に

基づくもので、萬世不易の不動の國體があつて他國の文化の攝取も同化も可能となるのである。儒教も佛教も其の誕生の本國に於けるよりも日本に於て一層正しい實踐の力を發揮するに至りたるは全く日本本來の實踐力によりて補强されたからである。

實踐は日本の一大特色であり、實踐への努力を指導し得ない教師は日本的師道として不完全なものである。舊體制に於ては所謂無爲にして化すといふやうな式の人格型の人が一種の人格者として敬重されて居る。高次の立派な人格者で其の人が唯呼吸をして居れば周圍に生きた感化を與へ得るといふことも必要であらう。併しこれは事實に於ては極めて少數の大人格者に望まれ得ることであつて、多數の教育者に於ては積極的に熱意を以て又技術的にも常に陣頭に立つて指導性を發揮して實踐への努力を促がすことを努めねばならない。

正しい實踐には創造が必要である。むすびの國日本に於ける創造は創生である。新しい生命を生み出だすことである。生命は伸長し愛育され發展されねばならない。伊弉諾尊、伊弉冉尊、二尊は大八洲を生み、山川、草木、神々を生み、これを統治あそばされる皇祖を生み給うたのである。そして自ら御自分の御殿を御造りになつて居る。又皇祖は畏くも神衣を御自ら御織りあそばされた。伊弉諾尊、伊弉冉尊の時代には未だ御殿を造る人が居らないので二尊御自ら御造りあそばされたのであらう。併し御自ら御造り御生みあそばされたといふことは極めて意義深いことである。皇祖の御時代には山鹿素行先生が中朝事實に於て「……それ天神の尊き織るべきの人無きに非ざる也。而して其の事を躬らしたまふ所以の者は、但親ら其の誠信を致して以て神衣をつくるのみに非ず。之を先んじ之を勞して、蠶織の艱難を備に

し、盤中の辛苦を嘗めて、以て天下の農桑を帥ゐ給ふ也……」と說いて居られるやうに織るべき人が居つたかも知れないが、皇祖御躬ら御織りあそばされる御精神には實に感激恐懼せねばならぬものがあるのである。自ら創生創造することに努むべき我々の努力の貴い具體的の本源をこゝに拜することが出來るのである。創生創造は實に日本固有の一大特質であり、國民學校に於て創造的實踐的人物を鍊成することは日本の特質に卽した日本的敎育であるのである。其の敎育力としての日本師道が創造的な實踐的な性格を以て充實されて居らねばならぬことは日本の師道として當然に要求されることである。此の意味に於て日本の敎師は最も創生力創造力に富む所の實踐的性格を修練せねばならない。常に進步的であらねばならない。退嬰倦怠は日本師道に許されないのである。

私心ある所には眞の創生創造はあり得ない。創生創造には私心のない眞心からの和が必要である。個人の修養に於ては全一的な人格が大切である。知性や情操や意志力の統合的活動や又心身一如としての純粹無雜な眞心の活動は或る意味に於て精神活動の和であり、心身の働きの和である。而も現代の敎育は昔個人又は極めて少數の人々によりて經營された塾の敎育とは異り多くは多數の敎師の團體生活によりて經營されて居るのであるから、現代の師道には同僚互に相親和し協力する意味の和の精神が必要である。昔よりも一層必要である。此の精神に缺如する學校に於ては師道の中にも創造力は養はれず、從つて敎へ子の側に於ても創造力の涵養が覺束ないことになる。元來日本は神と人と和合し、人と物と相和し人と人と相和すべき國柄である。和親は家族的國家としての一大特色であるべきであ

る。我が國は創造の本源としての和に充ちて居るべき筈である。和には純粋無雜の眞心が必要である。私欲私心のある所には和は不可能である。皇室を宗家として親子本位の一大家族國家である日本には親子の間に現はれるやうな純粋無雜な眞心が發揮されねばならぬ筈である。此の眞心は物に對しては其の眞實な實質を探求せずには居られぬやうな自發的態度ともなり、自然の法則に隨順する和の精神の下に科學の研究としても現はれるものである。又人に對しては和親協力の力として顯現されねばならぬ筈である。而も其の根本に於ては正反、排補等のあらゆる辯證法的考へ方を超越する絶對のものとしての忠の一元に歸一する皇運扶翼への眞心の働きであるべきである。こゝに徹する時に眞の創造が可能となるのである。科學の天才野口英世博士は友人との雜談では「僕は黃白などには用がない。

排日思想の高まつてゐる北米の國民にいかに日本人が馬鹿に出來ないかといふことを、はつきり見せてやるんだ」と語つた。（奥村鶴吉著野口英世傳）彼が愛國の至情が科學研究の力強い動力となり、遂に日本國は馬鹿にならぬことを世界の人々に示したのである。

生みたるものは之を育だて上げねばならない。生みたる生命や創造したるものを眞心を以て、其の現れとしての敬愛信の精神を以て此を育だて上げねばならない。發展といふことは創造の意味に不可缺のものである、發展があつて始めて創造が充實されるのである。故に師道に於ては其の修練に日新の發展が必要である。昔は師道の修練に於ては學術上の勉强を積みて篤行の實が擧げれば十分であつたらうが、現代はこれ等の外に體力の鍛鍊や指導法の研究や社會的に國家的に又世界的に實に多方面の修養上の發展が期圖せられねばならな

い。昔の先生には世間知らずの人もあつたらうが、現代の教師は世界の大勢にも通じ高邁なる識見にも長じて居らねばならない。昔の先生は人格の内容が單純でもよかつたが現代の師道には統一ある而も豐かな内容のある人格の修練が要求されて居る。

(三)、大國民としての修練

肇國の精神に基づき東亞新秩序の建設世界新秩序の確立といふ大使命を達する爲には大國民を錬成せねばならない。文部省の「臣民の道」に於ては大國民としての資質の重要なるものが說かれてある。茲に此を繰り返すことを見合すが敎育者は此の資質に於て模範的であり、又此の資質の發展に關して指導を與へねばならない。而も大國民としては私は其の人格に於て强靭なるものが必要であると信じて居る。强くしなやかであつて決して折れない人格である。不撓不屈萬難に逢つても挫折せずに、此を克服するやうな彈力ある强靭さが必要である。

それには一本の繩のみでは不十分で少くも二本以上の繩を縒り合はす必要がある。一見對立して居るものゝやうに見えて而も相和合し統一して一元的の全一的人格となるやうな人格が望ましい。皇軍は武勇に於て世界無敵であるが、又其の人情に厚い點に於ても數々の涙ぐましい仁愛の美談を殘して居る。此の兩者が一元となつて居る所に皇國軍人の大國民としての强靭な人格が發揮されて居るやうに思はれる。理知的な科學的知性に富める人で而も情操方面の豐かな人もあり得るのである。修文と練武との兩方面を一身に修練する事に現代師道の貴い點が存する。昔は武道の先生は別として、文の方面

の先生の中には淺見絅齋や細井廣澤のやうに武の方面に於ても相當の修練を積みたる人もあるが、多くは文の一方に傾いて居つたやうである。古賀精里のやうに風邪の場合には左右の兩腋に米俵をはさみ踴躍して以て發汗をなしたといふやうな心身の剛壯な人もあつたが、文の方面の先生には身體の虚弱な人もあつたのである。併し現代の師道に於ては心身共に健全なることが要求され、身體の弱い人には師道の實踐が望まれないことになつて居る。文武兩方面の修練により て大國民としての指導力を發揮せねばならないのである。

天に輝く太陽の熱と光とのみでは萬物の化育は行はれ得ない。これには地上の水が必要である。陰陽相和し天と地と一體となる所に萬物の化育が行はれる。而も此の天地の間には人間が居り、人は天地の法則に隨順し天地人の和する所に萬物の生成發展が實現されるのである。易に說いてあるやうに天には陰と陽、地には土と石との柔と剛、人には仁と義といふ二つのものが必要である。二つが一體となる所に物の發展が實現されるのである。而も仁と義との本源は眞心である。仁も義も眞心の發揮であるる。肇國の精神に基づき純粹無雜皇運扶翼の爲に盡くすといふ日本的な眞心が一方には仁として他方には義として發揮される所に大國民的人格が修練される。國民學校に於ても各教科の指導、其の教育全體が各其の特色を發揮して而も皇國の道に歸一する組織になつて居り、豐かに而も力強い統一をもつ所に强靭な大國民的の人格基礎が錬成されるやうになつて居る。

他の國では君と臣とは對立的であるが、日本に於ては君民一體であり君民國土一體である。一體觀の具體的實現を見る日本に於ては、凡べてが此の精神に基づかねばならない。天地一

體の德、天地人一體の力、仁義一如の人格、心身一如、知行合一、知德一體の教育皆これ日本的一體觀に根ざすべきもので、日本の師道も師弟一體の下に此の精神を中核として修練されべきである。

師弟道の復活

一

宇宙の大生命は天と地といふ大きな器物を利用して萬物の化育、其の生成發展に力を盡くして居る。天の德のみにても萬物の化育は行はれ得ない。必ず地の德をも必要とする。天の德は高明莊嚴而も日月私燭なしで公平に萬物を光被する。地の德は博厚慈愛にして萬物を載せて此を育くんでゐる。萬物の生成發展には此の天地の兩德が必要である。太陽の熱と光は大いに必要であるが、大地の水がなければ萬物の化育は不可能である。天と地とが一體となる所に初めて萬物の生成發展が可能となるのである。これは實に宇宙の大生命の力によるもので、日本に於ける神慮は絶對無限であつて、言葉では言ひ盡

くし得ないのであるが、夫れには少くとも、實に天地一體となつて萬物を化育し、萬物をして其の處を得せしむるといふ有難い御思召が含まれて居るのである。此の神慮は實に日本に於ける親心や師道の基本である。天地を一體となして萬物を化育し給ふ神慮に對しては自然に報本感謝の念が起るべきであり、これが日本に於ける子心や弟子道の基本精神である。自己を捨てて萬物の爲に力を盡くされる神慮は實に純粹の大至誠であり、これに隨順する親心や師道も亦至誠心であり、報本感謝の子心や弟子道も固よりまた至誠心の現はれである。

自我功利の念を克服し、一億一心、滅私奉公、捨我奉仕的に臣道を實踐することは日本の國民の傳統的美風であり、新體制に於ては益々此の精神が促進されねばならない。而もこれ實に至誠心の働きである。上意下達に對しては下は敬忠信義の子心を以てこれに答へ、下意上達

に對しては上は抱擁仁愛の親心を以てこれを迎へ、上下一心協力することも皆これ滅私奉公の至誠心の働きである。斯くして師弟道と新體制は其の精神の根本に於て一體であらねばならない。

昔から立派な師、立派な弟子と言はれる人は多く此の神慮に合致し、親心と子心との至誠を發揮して居るのである。私は今これに關する一二の實例を擧げて見る。

德川時代に尾張に中西淡淵といふ立派な學者があつた。人格の立派な人であり、其の門下から知名の人が輩出して居る。先生の家に權八といふ下僕が居つた。元來短氣者で永く一ケ所に勤めることが出來なかつたが、先生の家に雇はれ、先生の德に感化されて二十年間も先生に事へた。先生歿後遺言して金五兩を與へて其の鄉里に歸ることにされた。權八は悲嘆涕泣剃髮して僧となり、永く先生の冥福を祈つたといふ美談が殘されてある。先生は實に敦厚沈默、人と爭はず、強いて交遊を求めず、廉直篤行、名節を以て人を勵ますといふ實踐家であつた。

上杉鷹山公の師となつた細井平洲先生は淡淵先生の門人の一人で篤學謹行の人であつた。平洲先生は甚三郎といふ幼名であつたが、青年甚三郎は曾つて淡淵先生の代理として、先生の友人の親の病氣を見舞に行つたことがある。淡淵先生は、御前は病人に逢つて來たかと問はれた。甚三郎は病人には逢はず玄關で家人から病狀を聞いて來た、そして病氣は餘り重くないといふことを復命すると、淡淵先生は、病氣が輕いことが分つて居つたならば、下僕權八でも使にやればよかつたのに、遠路御前を煩はして氣の毒であつたと勞はれた。其の後再び甚三郎は右の病人を見舞に行つたのである。病家迄は相當の距離で甚

三郎の歸りは仲々遲かつたのである。すると淡淵先生は袴を着け、端座して、甚三郎の歸るのを待たれ、遂に夜を徹して曉に至るといふことであつた。全く親が子の歸るのを今や今やとまちこがれて居る心境である。

後、淡淵先生は江戸に移られ、甚三郎平洲も江戸に於て先生の塾に通つて研究を續けた。平洲は自炊生活をしてゐたのであるが、其の際淡淵先生は平洲先生に古い磁器の飯椀を與へられた。將來王侯の師傅とでもなつたら、瑤椀銀盃でも立派なものを用ゐるがよいが、夫れまでは此の古椀で粥でもすすれと言ふことであつた。平洲先生は此の古椀一つに非常な意味を感じ、心から感銘感激したのである。淡淵先生の考へでは或は古椀によつて儉樸の精神を教へ、又椀は上虛にして下實に、能く物を容れるといふ寓意を示す爲めであつたとのことである。

私自身は平洲先生の晩年の書一幅を手許に愛藏して居るが、其の文字は「君子以虛受人」といふ六字であつて、此の古椀の寓意の一端であるかとも想像して珍重して居るのである。さて又淡淵先生の此の親心に感激せる平洲先生は、自ら杉の木で箸を作り、三度の食事に此の古椀を用ゐ、殆んど五十年の間、此を愛用されたといふことである。鷹山公や、尾張侯の師範となられても矢張此の古椀を用ゐて居られた。平洲先生の妻も先生の精神を奉じ、家の婢僕に對しても平素此を毀損せざるやうに注意され、安永元年江戸大火、平洲先生の家も類燒せる時には、家具器材殆んど灰燼となつたが此の古椀は門人によりて持ち出だされて災厄を免れ、遂に五十年も終生愛用されることが出來たのである。恩師淡淵先生の親心を偲ぶ門弟平洲先生の子心として誠にゆかしいことである。

平洲先生は天資至誠の人であつたが、其の師淡淵先生の親心的なる至誠の感化を受け、至誠心の益〻立派になるやうに修養を積まれ、師恩に報いられたものと思はれる。其の友人小河仲栗、飛鳥子靜が妻や子供と共に平洲先生の家に四ケ年も厄介になつたことは名高い話である。而も近所の人々は此等の寄寓者を平洲先生の眞實の兄弟と思つて居つたのであり、附近の人々は平洲先生の老父を見て、あの老人は仕合な人である。三賢子、三孝婦、三順孫をもつて居ると言つて羨んで居つたといふことである。其の友に對する至誠心は實に美しいものであつた。

元來中西淡淵先生の門下生は其の友情に於て實に濃かなものがあり、淡淵先生の德風は門下生を感化し、門下生御互は又非常なる仲好しであつた。其の門下に南宮大湫といふ人がある。江戸の日本橋邊で

塾を開いてゐたが、非常な篤行家で、時人此を眞の君子と呼んだ位である。曾て掏摸が先生の財布を窃取し、先生の持物であることを知り、大に驚き、人を介して先生に財布を返へして御詫びをしたといふ逸話もあるのである。平洲先生は此の大湫先生と二十年目で江戸の自分の屋敷で面會し、大湫先生の居所が定まるまで二十五日間も自分の家で世話をなし、而も數日の間は來客をも斷り、兩先生は一室に閉ぢこもつて清談を交換して縷々盡くる所がなく、門弟共は兩先生は發狂でもしたのではないかと噂した程であつた。

又同門の弟子に伊藤冠峯といふ學者がある。名古屋の醫士伊藤玄澤といふ人は其の妹を冠峯先生に嫁し、大湫先生と競爭せしめようとした。冠峯先生はこれを氣付き、自分と同門の親友と競爭するに忍びず、田舍に引退したのである。其の中に大湫先生は尾張から江戸に出

たのであるが、財政上の都合妻子を連れて行くことも出來ず、一年餘も尾張に留め置いたのである。冠峯先生は此を氣の毒に思ひ、自分の家財などを質に入れて、金を作り、旅費を與へ付添までつけて大湫先生の妻子を江戸に送り届けたといふことである。恩師の親心に對しては、其の弟子たる兄弟達は各自其の性能に應じて發憤修養せねばならぬが、同門同窓の兄弟たる友達とも友誼を厚くし、互に切磋琢磨の功を積み、和親協力することはこれまた實に至誠心の子心の現はれであつて、恩師の親心に對する子心の報本感謝である。

米澤藩は中興の藩主上杉鷹山公によりて救はれ、今日尚ほ其の御蔭を蒙つて居るのである。産物としては米澤織は全く鷹山公の賜物であり、鯉の養殖の如きに至るまで、今日同地方の産業は多く鷹山公の奬勵によるものである。殊に子弟の教育に熱心なることは鷹山公の建設された興讓館の教育精神に基づくものである。而もこれ皆鷹山公の至誠心と其の師平洲先生の至誠心の一體協力の結果である。鷹山公は十七歳で家督を相續されたのであるが、其の頃の米澤は藩祖上杉謙信公や會津時代の景勝公などの時代とは全く異り、財政上に於ては非常な困難に陷り、十五萬石の大名でありながら、其の近親の尾張侯の不幸に際し、弔問の使者一人を送るのに、其の旅費の支出にも窮した程であつた。殊に士風も頽廢し奢侈に流れて居つたのである。精神的に又物質的にもこれが復興の偉業を完遂せるは全く、鷹山公と平洲先生の力である。これを中心として青年革新の忠義の士が、庶政革新の責めに任じたのである。鷹山公が晩年其の恩師平洲先生を鄉里に招き迎師の誠を盡くせる美談は國定教科書にも記載され人の能く知る所である。此の實況を叙された平洲先生の書簡は實に一字一涙であ

る。關根停車場附近にある迎師の寺は今尙昔の儘に殘り、庭前には一字一涙の碑も建てられて居る。平洲先生の親心的な師道と鷹山公の子心的な弟子道は千載に芳ばしといふべきである。

其の他師弟道の美談は日本に於ては仲々豐富であり、松下村塾の師弟道の如きは皆人の能く知る所である。或は九段の靖國神社構内の大記念像大村益次郎公を初め幾多明治維新時代の建設に功勞ある人を出だせる廣瀨淡窓先生の咸宜園に於ける師弟道の如きも感激的の光景が見られるのである。先生の親心に對し、先生の重病の折りに斷食して其の全快を神樣に祈れる青年釋德令の子心としての弟子道の如きも涙ぐましいものである。

二

親心としての師道は弟子の爲め、道の爲めに捨我奉仕の誠をいたすべきである。日月私照なしで、何れの弟子に對しても、親が凡べての子供に公平に其の愛情を注ぎ得るやうに、公平な態度で力一杯に指導すべきである。親が子に對するやうに卒直なる忠言が望ましい。殊に出來るだけ實踐躬行、不言にして化することが出來れば立派なものである。佐藤一齋先生は言志錄に於て「敎而化之、化難」及也、化而敎之、敎易」入也」と述べて居られるが、誠に其の通りである。此の場合此の敎といふものは主として知識を指して居られると思ふが、知識を敎へ込んで、それによつて弟子を薰化しようとしても仲々薰化は困難である。併し先づ薰化して而して後、知識を授くれば弟子達は此の知識を能く體得するといふ譯で、これ實に師弟間の眞相を突いたものである。師たる人が一生懸命研究を積み、實踐躬行修養に怠らなければ、弟子は自ら

薫化される。既に薫化されて居る心境に對し、先生が其の蘊蓄を傾けて教授すれば弟子達は日頃尊信して居る先生の話であるから眞面目に此を受入れ自得するに至り易いものである。

子心としての弟子道に於ては、師を尊信し敬ひ親むことが必要である。此の態度なくしては師の千言萬語も反撥的となつて自得が不可能である。親心としての師の精神を奉じ、自奮自發の至誠心を振起して研學實踐に力めねばならない。これがなによりの報本感謝の現はれである。

師弟は實に同行であるべきである。師は積極的な指導の地位に居つて同行し、弟子は被指導の立場で同行するのである。或意味に於て啐啄同時である。雛が卵子の殻の中でコツコツピーピーと音を立てる。親鳥は外部から此の殻を啄み砕いて雛を殻から出だしてやる。

雛が内部でコツコツと音を立てる前に親鳥が殻を砕けば雛を殺すことになる。併し、雛がコツコツと内部で音を立てても、親鳥が知らん顔をして居れば雛は殻から出ることが困難である。師は親鳥のやうに弟子の卵子を溫めてやる必要がある。又弟子の方では自奮自發自ら進んで殻をつつき、親鳥の指導を待つことが必要である。親鳥は自ら殻を砕いてやるだけの力を最も適當な時期に發揮し、其の指導の時期を失はないやうに注意せねばならない。ここに師弟間の微妙なる關係がある。要は師弟間の至誠心の一體化である。師は捨我奉仕君國の爲めに道を研究して、青年を導く、青年は師の精神を體し、捨我奉仕滅私奉公の精神に立ち、自奮自發的に研學實踐に力める。此の呼吸が一致する所に兩者の至誠心の一體化が見られるのである。而も日本は大家族的國家であり、我々は皆親子兄弟の關係になつて居り、億兆一心

の美風を發揮すべきである。人の子を自分の子のやうに思つて、これに親心を注ぐことは困難であるといふことは、西洋の個人主義の國に於ける實情であるかも知れない。日本に於ては大家族制度の國柄として、これは左程困難ではない。師道の本義を發揮することに躊躇する人はない筈である。弟子も亦、他人の先生を自分の親のやうに思ひ子心を發揮するといふことは、個人主義の國に於ては困難かも知れないが、家族主義の日本に於ては夫れはむしろ自然であるべきである。先生は決して他人ではないのである。我々の大家族の一人としての先覺者である。

併し今日の教育の設備に於ては、親心子心の發揮に困難な場合も少くはない。數百人の學生に對し、單に講義をなし此を聽くだけでは、恐らく親心子心の發揮も困難なことであらう。師弟同行、晬啄同時が必

要である。師弟の接觸が必要である。從つて講義の外に多くの演習を設け、少數群の學生と常に接觸することが必要であり、或は勤勞作業の同行により、學友會等の會合によつて、師弟相互の接觸の機會を多くし教育者の積極的指導が必要である。師の自宅面會日を設け、師の自宅に於て師弟互に語り合ふことは殊に美しいことである。一億一心は口のみでは不十分である。各方面の群團に於て、夫れ夫れ事實的にこれに力むべきである。近時發達せる隣組の如きもこれに資することが多い。學校に於ては師弟の間に於て、又師相互間に於て、弟子相互の間に於て、親心子心、兄弟心の精神に立ちて一校一心の體制を作らねばならない。

我が師を語る

私は幼少の時に父を失ひ、母に生き別れの境遇となり、悲慘なる家庭生活を經驗したのであるが、其の代り多くの親しい友達と、多くの立派な先生とに惠まれたことは、私の生涯の幸福で常に感謝して居るのである。小學校から大學を卒るまで澤山の先生に御世話になり、海外に於ても懇切な指導を受けた先生があるのであるが、今は唯だ小學校から中學校迄に限り、而も其の一部の御方について述べて見たいと思ふ。

私は明治十四年の春、滿六歳の時、米澤の小學校の初等六級といふ今日の第一年級に入學したのであるが、其の時の先生は石塚鐵平といふ先生である。先生は十八九歳の青年で、多分中學校を卒業された位であらうが、體軀が大きく相貌も立派で仲々力強い感じのする人柄であり、殊に算術がよく出來た御方で、時々先生の御宅まで押しかけて、算術などを習つたものである。其の後先生は上級の學校に入られ、東大の駒場の農科大學を卒業され、地方の農業技師や農學校長として盡力されることになつた。私は家庭上の色々な境遇のために、親族の世話になることになり、他の小學校に轉じ、遂には會津の日新館などに入り、社會に出でゝは多く中國や關西方面に奉職し、石塚先生とは八九歳の頃に御別れしたまゝで二十六七年も御目に懸る機會がなく、常に殘念に思つてゐたのである。

丁度明治四十三年であつたと思ふ。先生は新潟縣の加茂農學校の校長として令名のあつた頃である。私は文部省の視學官として新潟縣の學事視察の命を受け、今度こそ久々にて御目に懸かることが出來ると心中私かに大に喜び、早速先生まで加茂に到着の豫定日を御知ら

せしたのである。私は信州路から入つて高田に泊り、謙信公の御遺跡などを拜して居ると、其の夜遲く突然先生が加茂から態々高田へ御越しになつたので、私も大に驚き且つ意外の嬉しさに打たれ、餘りの感激に言葉も出ずに、先生の懷かしい御顏をおがみながら、涙がボロ〳〵と出るのを禁じ得なかつた。「君が加茂に來るまでジットして待つて居れない。一刻も早く逢ひたかつたから、今夜は全く昔の石塚と小西の會合だ……」といふ先生の有り難い御言葉である。私の胸は感激其のものであつた。親にもまさる先生の親心から限りない貴い教訓を受けたのであつた。

其の後は幸に度々御目に懸る機會を惠まれた。先生は今は齡八十歲ではあるが、尙矍鑠たるもので、鋤鍬をとつて御自分の畑を耕して居られる。私は時々私の好きな稻子の佃煮などを頂戴して恐縮致して居る。先年東京文理科大學の加藤仁平氏は學生と共に、石塚先生を訪れ、先生の御案內で私の誕生の家などを見られ、家を背景に、門前に立たれた先生の御姿を撮影し、これを同氏の名著「山鹿素行の教育思想」の中に揭載し、私の還曆記念とされたことは私の心から感謝する所である。

×

私は十一歲の時に米澤から會津の若松へ移り、昔の藩校日新館に入つた。當時は寺小屋のやうな風で、私は自分の机を肩にかけて入學したのである。豫科では漢文の素讀と習字と、劍道と槍とが必修科であつた。素讀の先生は美聲の持主で、我々は實に興味を以て聲高く調子をつけて素讀したものであつた。劍道や槍の先生は何れも鳥羽伏見の戰や、會津の戰で奮闘した會津武士で、負傷した御方も二三人あつて、

全く生きた武道精神の權化であつた。本科に於ては、漢文の解釋、英語、數學、武道といふ必修科目であつた。漢文の先生は白虎隊の詩を作られた佐原老先生と今泉岫雲といふ温厚な老先生であつた。何れも當時の會津に於ける最も偉大なる學者であつた。私の青年時代の初期に於て文武の兩方面に於ける最も偉大なる先生に御世話になつたことは私の精神生活の態度を決定せるものであつて心から感謝感激に充ちて居るのである。

×

日新館に二三年在學してゐたが、日新館は遂に廢館になり、私は今泉岫雲先生の塾に入つて漢學を勉強することになり、又他の先生について英語や數學などを勉強してゐた。今泉塾での同學の青年長峯君は其の頃縣下に唯だ一つの中學であつた福島縣尋常中學校といふ學校

に入ることになつた。これは今の安積中學校であつて、郡山市の郊外開盛山の開墾地にあるのである。實は私は此の時まで中學校といふ學校の名も其の存在も知らなかつた。長峯君が中學に入つたといふので、私も好奇心から學校の樣子を問合はせて見ると、仲々立派な學校で、卒業すれば如何なるものにでもなれるといふ素晴らしい學校であるから、御前も是非來いとの返事であつた。

私は寸時もジットして居れず、直ちに叔父なる養父に是非々々と迫り漸く許を得た。養父は、中學生は洋服を着るらしいといふので、自分の黒ラシャの古い二重マントを利用してズボンとチヨッキを造つて呉れ、更に古物屋から大人用のスコッチの背廣を買つて私に着せて呉れた。下着のシャツやヅボン下などいふものゝ存在を知らないから暫らくの間は肉の上に直接に洋服を着たもので、スコッチの毛が肌を刺すには

弱つた。さて荷擔夫は布團を、私は書物や雜品入の行李を背負ひ、猫苗代湖を渡つて愈學校所在地の寒村にたどりつき木賃宿に泊つた。翌日學校へ行き、入學願書を提出すると、事務所では、今は六月ではないか、入學の時期は四月であつて、既に入學試驗も濟んでしまつた。今頃になつて願書を受けつけられるかと、半ば叱られるやうに斷られた。私はコヽダ、頑張らねばならないと思つた。嘆願するやうに、又怒るやうに、三日でも五日でも、許可を得るまで此の場所を去らないといふ態度を示した。事務の人はもてあましたものと見え、隣りの校長室に入つて、暫らく相談した。間もなく、からだの小さな先生らしい人が來て、算術の問題を出だされた。半分以上出來たらしい。此の先生が校長室へ入ると、私も校長室に入れと命ぜられた。校長は頰鬚をはやした仲恐い人のやうに思はれた。校長から問はれもしなかつたが、私は田

舍に居るので中學なんといふ學校も知らなかつた。入學の時期なども全く知らなかつた。自分の友達が入つたので、……などゝ恐る〳〵話した所、校長は恐い顏ではあるが、何處かに微笑を洩らしながら、ヨロシイ入學を許してやる。併し本入學には出來ない。參觀生といふ資格だ。制服も制帽をも着用することは許されない。御前の着てゐる背廣の洋服でよろしい。來月は第一學期の試驗があるから、成績がよい場合には本入學にしてやる。勉强せよといふ情けのある言葉であつて、私は此の時の嬉しさは今でも忘れることは出來ない。今時は入學試驗に關することが社會の大きな問題となつて居るが、私の中學入學は全く此のやうな事情であつて、實に感慨無量である。因みに此頃の生徒數は一縣一校であるが、僅かに百五六十名に過ぎなかつた。

私の一生はこの中學の入學によつて決定された。この時の校長の

情け深い英斷によつて決定された。校長は實に和田豐先生である。
東京高師の元老である。二十六歳で中學校の校長となつたえらい人
である。晩年は御影師範の校長として教育界の元勳として景仰され
て居られたことは人の知る所である。先生は意志が強く、而も情け深
く、包容力の大きな先生であつた。先生が校長の時代に初めて大學出
身の立派な先生達が數名も此の片田舍の學校に就任された。先生は
何時も先生よりもえらい先生を招聘することに力められたやうであ
る。私が私の親以上に御世話になつた岡田五兎先生も和田校長から
招聘されたのである。

岡田五兎先生のことについては拙著「教育精神の研究」の中にも說述
してあるのであるから、今は其の一端について語ることにする。
先生は明治二十二年東大文科大學に於て、谷本博士などゝ同時に、獨

逸人ハウスクネヒトについてヘルバルトの教育學を學ばれ、詩學漢文
などを專攻された。併し夙に英語英文學の造詣が深く、獨逸語にも通
じチーグラーの教育學などを飜譯されたこともある。一時工部大學
に居られたこともあり理科方面の學問にも理解があり、歷史殊に國史
に精通し、又哲學方面の學德が豐富であり、適切にして深遠なる人生觀
世界觀を以て青年を指導された。水戸の支藩守山藩の出身であり、儒
者としての家柄であり、大義名分を重んじ、渾身これ日本精神ともいふ
べき人であるが、決して偏狹な人ではない。至誠眞實、全くの無私奉仕、
金も名譽も生命もいらないといふ始末に困る先生である。忠孝一本
の御手本である。併し四角四面で、青年から敬遠されるといふことで
はない。外面は温厚で默々であるが、青年と
は能く語ることを樂しまれる。內面は非常に剛であつて、千萬人と雖

も恐れることなく、必要が迫れば敢然起つ人である。青年は實に母のやうに親しみ慕ひ、父のやうに敬ひ事へる。知德一體、知行合一、善美一體の人とは先生のやうな人であらうと思ふ。私は決して先生に讃辭を呈するのではない。先生は多分私が此の物語りの中に先生のことについて語つて居るのを知られたならば、先生は心中不快を感せられるに相違ない。私は唯だ先生についての事實を其の儘に語つて居るのである。日本に此のやうな先生が、現に現存して居られるといふ事實其のものを述べて居るのであつて、決して先生をほめて居るのではない。

私共が青年時代に、中學校時代に斯のやうな先生に御世話になつたことは實に無上の幸福である。而も先生は實に今も尙我々を導きくださる先生である。一生涯御世話くださる先生である。

師範教育革新の指標

師範學校の國立と學者と同等の待遇

一

師範教育の革新は國民學校の精神や其の機構を基準となし、他の教育制度にも考慮を拂ひ、國家社會の情勢に適するやうに考慮されねばならない。

國民學校は凡べての國民の基礎的錬成の道場である。皇國の道に則り國民としての基礎的錬成であるのに、多數は國民學校の教育を受けたのみで社會に出ることになり、更に働きながら、青年學校の教育を受けることになるが、教育を純粋に受けるといふことは國民學校の教育時期である。夫れだけ國民學校の教育的責務が重大である。又中等教育以上の上級の學校に進むものに取りても國民學校の教育は其の基礎であるのである。國民學校は實に國民としての生活を遂げる上について、國民全部の基礎的な錬成をなすといふ大任務を有するのである。國民としての基礎工事であるから、普通の物質的な基礎工事は固定的な堅固なものを造れば、其の上に家屋を建築するのであるが、教育上の基礎工事は一面は固定的で不動なものであるが、他面に於ては夫れが内容的にも外延的にも進展し得る生命ある基礎工事であらねばならない。

從來の教育は兎角心と身とは別になつて居つたが、國民學校では心身一如の建前が重視され、體錬の上に於ても精神が大切であり、知識の方面に於ても身體上の實行が必要であり、廣義の勞作的教育が非常に高唱されてゐるのである。

從來の教育は其の知育にも徹底を缺き、又動もすれば知育偏重とも

なつたが、國民學校では知德一體の教育が叫ばれることになつた。知と行の合一が重要視されることになつた。教授訓練、養護の一體が說かれ學校、家庭、社會の緊密なる聯絡が注意され、教科が統合され、創造的實踐的な全一的人格としての大國民を養成せねばならない。夫れには又情操の醇化、豐かなる教養も必要である。要は東亞の新秩序を建設し、世界平和に貢獻しようとする大業達成の次代の大國民を作らねばならない。實力的に世界の建直しを實行し得る人物を作らねばならない。

二

師範教育は斯様な重要なる大任務を有する國民學校に於ける教師を養成するのであるから、國家の發達、國力の進展、國家の經營、國策の達

成遂行の鍵は師範教育にあると言つてよい。師範教育は實に大國民を作るための模範的な指導實踐の力を養はねばならない。

生徒は身體に於ても模範的に强靭健全であり、而も潤達剛健であらねばならない。情操に於ても豐かに純なものがあり、心身一如、知德一體、先達的に創造的實踐的に大國民的としての資質の教養を積まねばならない。而も國民教育の重要なる意義を體得し、これに當る教職の尊い所以を自覺し、意氣と矜持とが殊に必要である。

教育審議會の特別委員長の報告の中にも、師範教育の趣旨について次の通り述べられて居る。

一、皇國の道の修練を重んじ、實踐躬行以て人の先達たるの修養を積ましむるを旨とすること。

二、勤勞による身心一體の訓練を重んじ、學識の淨化、體位の向上、情操

の醇化に力め、東亞並に世界に於ける皇國の使命を體得して克く大國民錬成の重責に任ずべき識見實力を養はしむること。

次代の大國民を養成すべき師範生は自ら先づ大國民たるの資質に培はねばならない。それにはどうしても皇國の使命を體得し、自分達の任務の重大なるを自覺し任務遂行の意氣と矜持とが必要である。

三

國民學校は國家の教育行政上、眞に基礎的な意味に於て、最も大切なものであり、其の仕事は國家の重要な仕事である。其の教師養成所たる師範學校も國立として國家の直轄とすべきである。國民教育の徹底の上より見て國立とせねばならない。教職遂行についての生徒の意氣と矜持とに培ふ點から見ても國立として堂々と教養を積ましむる必要がある。師範學校の生徒たることや、國民學校の教師たることが恥づかしいといふやうな氣分があつたら、夫れだけでも大國民としての資質を養ふ上に暗影があるやうに思はれる。意氣を以て職責を完うする熱情も起つて來ない。こゝに國民教育の鍵が潜んで居るのである。同じく皇國の青年である。他の友人は境遇上專門學校や大學へ進むが、自分達は家庭の都合上師範學校に入り、而も卒業後の身分待遇、社會上の地位等が左程重んじられて居らず、二十年三十年と勤續精勵しても生活や子女の教育にも困るといふことがあつては、國家社會が青年に對する態度に於て公平といふことが出來ない。滅私奉公は凡べての國民の臣道實踐の根本精神である。併し國家社會は其の職に應じて相當の待遇を與へねばならない。師範教育の機構内容の革新についても色々の問題があるが、此の革新されたる内容が效果を

奏するには、一方に於ては師範學校は國立の少くも專問程度又は現在の高等師範の程度となり、他方に於ては卒業後の待遇に根本的革新を加へ、社會的の待遇に於ても劃期的な優遇案を實現する必要がある。

私は先般中外商業新報に三回に亙り、東京日日新聞に二回に亙りて教師待遇の事について論述したのであるが國民學校の教師は一生の間、教師の職に滿足して意氣と矜持とに充ち情熱を以て子弟を教育し得るやうにありたい。國民學校の教師には國家の重職に居る人の受け得る立派な待遇を與へたい。國民學校の教師は天性子供を愛し、夫れに人の師となる爲の深い教養を受け、身體も丈夫で、立派な見識をもつて居るといふ模範的な日本人としての教師であつて、普通の人で代用することの出來ないものである。學者は少し位健康を害しても仕事を續けられる。教師は併し少しでも健康を害したら、最早其の職に留まることが出來ぬ程健康體であらねばならない。學者が大學に於て講義をする場合には一年の間其の序論のみを說いて居ることもあらうが、國民學校では所定の教材を而も明確に子供の身心の發達に注意しながら教授せねばならない。大學の教授として差支ない人でも國民學校の教師となれない人が多い。大學の教授も一面には學生を教育する教育家であり、實踐躬行的に範を示すべきは當然であるが、社會の通常の考としては國民學校の教師に對しては、一層實踐躬行を要求して居る。これは子供は先生を模範として先生の眞似をするから、先生の實踐躬行が大切なのである。知識に於ては國民學校の教師は或る專問の方面には深くはないが、其の代り、各方面に關する知識や技能を相當豐富に而も此を明確に理解し體得して居らねばならない。大學教授よりも、求められる所が多く、且つ嚴しくあつて、而も其の待遇

に於て非常に差異がある。學者を勅任官にするならば教師も勅任官にしてよいのである。學士院から二名の貴族院議員の候補を推薦するならば、教育者の間から數名の貴族院議員を推薦してよい筈である。現に滿洲に於ては國民學校には勅任の校長が居るといふことである。文部省の所管の諸學校の俸給令といふものは大體に於て、專問の知識を有するものを厚く遇して、全般的に豐かな教養を積み人の師表たるべき人に對しての待遇は非常に薄いのである。大體に於て知識偏重の俸給令である。而も最近文部省は其の教育方針として、何れの學校に於ても、抽象的な空な觀念の詰込を戒め、日本的な精神教育の重要なることを諭して居るのであるから、俸給令も其の意味に順應して改正されねばならない。國民學校の教師の如く、全く實踐躬行的に範を示す所の教育者は厚く此を待遇せねばならない。近い將來に於て師範教育の革新も斷行され、國民學校の教師は其の教養に於て一層深められることゝ思ふが、同時に其の待遇に於て學者と同等の待遇を受け得るやうに途を開くことが肝要である。

今や東亞の新秩序建設、世界秩序の建直しといふ大業を達成せねばならぬ未曾有の難局を處理する次代の大國民を養成せねばならぬのである。各方面に於ける人物を養成することが、大業達成の重大なる仕事である。科學の發達の如き一つの重要國策から見ても、上層に於ていかにもがいても、根柢の基礎に於て堅實な教育を施さねば如何とも爲し難いのである。國民教育としての基礎的錬成は一見廻り遠いやうであるが、實は最も捷徑であるのである。師範の程度を高めると共に此を國立と爲し卒業生の待遇に於て劃期的なる大革新を斷行することは實に焦眉の急務である。

私は師範學校の國立と教師の優遇は師範教育革新の鍵であると說いた。これは決して日本の青年を侮つたのではない。教育の制度として國家が當然斯くなすべしと思ふのである。小學校の教師は非常に冷遇であり、而も一時は俸給の給與延期の村さへも少らずあつたのである。然るに師範學校への希望者はたとへ一時は多少減少したとはいへ、兎も角相當の志願者を得て居つたことは日本の青年や父兄は決して唯に名譽や物質によりてのみ左右さるゝものではない、眞に教育の重要性を認めて居るのであるといふことを證明するものである。斯くあればこそ國家は國民の此の態度を敬重し、益〻心から此を優遇する途を考へねばならない。

又國民學校のために師範教育が重要であるやうに、師範教育の任に當る教師を養成することも同樣に非常な重大なる問題である。青年

に教育者としての意氣と矜持とをもたせる爲めには、其の教師に一種の宗教的信念が必要である。單に學識が深いといふだけでは不十分である。昔廣瀨淡窓先生が日田の盆地に日本の全土から三千餘名の青年をひきつけたのは、其の力の中には一種の宗教的なものがあつた爲めである。先生の儒教は日本的儒教で而かも敬天といふ宗教的儒教であり、先生自ら其の實踐につとめられたのである。吉田松陰先生の如きも國體的信仰の熱情を以て青年を薫化されたのである。師範學校の教師の中に一人でもよいから、泣きながら楠公を說く人があるならば、青年自身の中には待遇などの事を意に介することなく、國立と府縣立など問題にすることなく、教育により滅私奉公の實踐を爲すものも輩出して來るであらう。これは國立問題や待遇問題とは自ら別であつて教育本質上の問題であり、是非斯樣にあらねばならぬ筈の

ものである。併し我々は教育の制度の問題としては飽く迄も國立と待遇の革新との必要なることを叫ぶものである。

日本的家庭の建設

一

日本の歴史の本質は惟神の大道の實現であり、精神を基本としての道の具現であり、道と事實とは一元一體である。而も眞の實存の姿は物心一如の充實的な強い生命であり、歴史の中に國民生活の規範が含まれて居るのである。

夫婦本位の一代限りである西洋の家には物的な遺産の相續があるが精神的な家督相續といふものはない。永遠より永遠への家の存續といふ精神的な家督相續は、全く日本に於てのみ見られる家の特徴である。こゝに報本反始、子孫愛撫、祖孫一體としての親子本位である我が家族精神の美しいものが現はれて居るのである。

皇室を中心としての祖孫一體の我が家族國家に於ける各家庭は此の日本的な家族制度の精神を基礎として建設され繁榮せしめられねばならぬものである。

義は君臣にして情は父子、日本の國民が皇室を崇敬し奉り、捨我奉仕、滅私奉公、皇運扶翼に邁進することは、君臣といふ關係から見れば忠義と言つてよいが、我々の日本の大家族が、其の宗家を崇敬して御奉公をするといふ點から見れば、これ卽ち孝の行である。これが卽ち各家庭の直接の祖先の精神にも副ふ所の孝でもある。忠孝一本といふ世界無比の美しい道德から見ると、この我々の日本的な家庭といふものは其の本質に於ては私的生活ではなく、公的な生活であらねばならない。各家庭は各家庭の爲めの存在ではない。實に國家の爲めの家庭であり、國家に捧げられて居る家庭でなければならない。立派な家庭を建

設し、家庭を立派に繁榮せしむるといふことは、國家の發展に貢獻し、皇運を扶翼し奉るといふ點に於て意味があるのである。其のことが又祖先や父母への孝ともなり、子孫愛撫の精神とも一致するのである。

以上は縱の方面から見ての日本的家庭の姿であるが、更に此を橫の方面から眺めて見ると、我々は皆大家族の成員であり、畏れ多くも陛下の赤子である。色々の因緣によりて夫々各自の家庭を形成して居るが一億一心の兄弟關係である。此の意味に於て各家庭の間には障壁がなく、隣保親睦和合の美風が見られねばならぬ筈のものである。自分の家庭のみの繁榮ではなく、互に相助け相協力して各家庭の繁榮を祈念せねばならぬ筈のものである。孤立的な、而も自分の家のみの福利を圖るやうな家族的個人主義や家族的利己主義は日本的の家庭生活とは相容れないものがある。近時漸く發展の氣運を示しつゝある

隣組の機構は其の運用を全ふするならば、此の點に於て日本本來の家庭の間に美しい關係を發揮せしむるといふ少からざる力となることであらう。

テンニイスは社會の種類を利益社會と、協同社會の二つに分けて居る。そして家庭生活を協同社會の模範的な類型となして居る。彼の言ふ家庭生活は西洋の夫婦本位の一代限りの家庭である。而も社會其のものは國家よりも先行的な團體生活であると考へられて居る。併し日本に於ける社會は國家あつての社會であり、日本の國家は大家族的國家であるとするならば、テンニイスの所謂協同社會や利益社會のみの種類では我が國にはあてはまらないのである。日本の社會にも各自の利益收得を目指す社會もあらうし、團體全體の爲の福祉の增進に協力する所謂協同社會もあるであらうが、併し日本に於ける本質

的な社會は皇運扶翼を目的とする億兆一心の社會でなければならない。これは日本以外に見ることが出來ないのであるから、私は此を日本的社會と名づける。日本に於ける利益社會や協同社會は日本的社會の精神によりて統制されねばならない。個人々々の利益も私欲の動機を克服して公益のための手段であり、結局日本的社會の公益の發展を目的とすべきであつて、嚴格に言はゞ日本に於てはテンニイスの所謂利益社會といふやうなものゝ存在は許されぬことになる。又或一團體員全體が協力して全體の爲めの福祉を圖る所の所謂協同社會も日本的社會全體の福祉を圖ることにならねばならない。一團體のみの福祉を目指すやうな一團體的個人主義的な協同社會に陷つてはならないのである。

日本的家庭はテンニイスの所謂協同社會以上のものである。私の言ふ日本的社會に屬するものであつて、縱には祖孫一體の生活規範を實踐し、橫には億兆一心の生活規範に從ひ、皇運扶翼に邁進すべき、時間的及空間的に充實せる永遠の公的存在體的生命體である。殊に現下の國情に於ては日本の本來の家庭の公的な本質が大に發揮されねばならないのである。各家庭に於ける精神生活は直ちに國家社會の精神上の大きな問題であり、各家庭の衣食住の實際生活は卽ち國家社會の直接の問題である。家族の成員殊に子女の育成保健等の事項は殊に國家社會の大切な問題である。各家庭は高度國防の國策に從ひ國民精神の基礎に立ちて、家庭生活の合理化を圖り、子女の教養に力を盡くし、益々皇國日本の家庭の公的な本質を發揮せねばならない。

二

日本的家庭の建設

更に日本家庭に於ける生活の内容について考へて見たい。

日本は其の國柄の上から祭政一致の國である。日本的な家庭の生活に於ても此の特徴が發揮されねばならない。

皇祖の大御靈の大御しるしである大麻が家庭に奉安され、各家庭の祖先の祭祀も鄭重に行はれ、敬神崇祖神人合一、祖孫一體の信念といふ敬虔心に基づいて家政が經營統理され、又子女の教養が行はれるといふことは日本的家庭の嚴肅な特徴である。此の精神が溢れる家庭に於ては明朗公明の空氣に充ち、闇陰の生活がなく、家庭的良心に於て何等恥づる所がなく、神慮奉行の實踐者として勇んで仕事に從事することが出來る。

子女の育成教育は子孫愛撫といふ人間の本然の性情にも基づくものであるが、日本に於ては我々の子女は我々の子女であつて同時に又

我々の家の子女である。從つて家の祖先傳來の家訓家風といふものを粗末にする譯には行かない。時代に從ひ、其の意義解釋の重點に多少異る所があるとしても、立派な家訓や家風に對しては其の精神を尊重せねばならない。殊に我々の子女は　陛下の赤子であるから常に大御心を奉體して其の實踐に力め得るやうに立派に躾けねばならない。此の意味に於て、日本の家庭に於ては、子女の教養の上に於て、世界の何れの國にも優る所の熱意が見られるのである。又子女の側に於ても自分達の個我は孤立的のものではない。家と一體である。現在の家庭としての家のみではない。祖孫一體としての無限な家の生活と一體であるといふことを體得せねばならない。而も家なくしては自分はないのである。又此の家は國家なくしては成立し存續し得ないのである。陛下の赤子として御奉公申上ぐべき責務をもつて居る

といふ捨我奉仕的な躾けを受け、又こゝに自覺するやうに導き入れられねばならない。

三

敬の精神は下から上への態度として最も大切なものである。我々國民としての家庭生活に於ても、前段に述べたやうに、此の敬に基づく所の敬虔の精神は日本的家庭に於ける第一の特色であらねばならない。更に敬の精神は廣く各自の家に向ふことが出來る。家の人々が我が家を愛することは自然の情である。併し日本に於ては此の愛の外に家に對する敬の精神が必要である。家門を辱かしめず、家名を汚さずといふ廉恥の精神は家に對する敬の精神の現はれである。我々は我々の愛する人の前に於ては、卑怯未練な恥づべき行爲をなすことは出來ない。愛も固より廉恥の精神を養ふものではあるが、併し我々の家の存續には祖先の大きな骨折が加つて居り、祖先の貴い魂を含んで居る我々の家に對しては敬の精神を注がねばならない。日本に於ては愛國は國を敬愛するのである。單なる愛ではない。敬愛である。日本の國の存續發展は實に大御稜威の貴い御力によるもので、又祖先の崇高な努力の參與によるものである。而も神國であるといふ日本の國に對しては自ら敬の精神が起らざるを得ないのである。家庭に對しても單に家を愛するのみではなく、家庭を敬し且つ愛することが日本の特徴である。

家長を信じ、此を敬ひ親むといふことは自然に心から家長に服從する家族的な美德を生むことになる。家長は又家族の成員に對し、公平に此を愛し、此を信じ、出來るだけ其の性能に應じて夫れ〴〵の職分を

盡くし得るやうに輔導成育の務を果すべきである。こゝに一家の圓滿なる統率が可能となるのである。

家庭の成員の間は各自の誠心を以て結ばれ、其の現はれとして常に敬・愛・信の精神を靱帶とすべきである。又立派な家庭に於てはこれが自然に現はれるものであるが、併し常に理想的に行くものではない。各自の克己自制、遜讓の德を養ふ必要がある。親子の間は純粹な至誠其のものであつて、私心私欲の起る間隙がないが、これとても時に或は濁つたり曇つたりすることもあるのであるから相互の間に相當の心懸が必要である。

四

國民學校に於ては皇國の道に則り、大國民を育成する爲に、心身一如の實踐が重んぜられ、學校と家庭と連絡して、兒童の躾けについて大きな力を盡くすべきことが強調されてある。教育上家庭は實に國民の心身錬成の苗圃である。國民學校に入學以前に於ける育成は固より、國民學校へ入學以後に於ても家庭の教育力は實に強大なものである。國民學校の教育を徹底せしむるには、家庭の兩親に國民學校の教育精神を十分に理解せしめる必要があり、此の意味に於て兩親の再教育に關する施設も大切なことである。

思想其のものを味ふことは綽々として餘裕のある豐かな教養に有益であり、又思想は實踐の内容であり、或は實踐の方向や方法を指示することに必要である。併し思想其のものは目的ではない。目的は實踐である。道の實行である。家庭は觀念享樂の場所でもなければ、理論追求の場所でもない。實に心身一如情意實踐の溫かな道場であり、

實行實踐は家庭生活の一大特徴である。此の實踐の内容、其の方向や方法は思想の力に俟たねばならないが、目的は實踐實行に存し、思想は廣義の方法である。日本の民族が實踐的であるのは色々の理由があるが、日本は一大家族であるといふこともこれが大きな理由の一つであらう。

温かな實踐道場としての家庭に於ては子女の教養の上に於て躾けといふ役目の大部分が果たされねばならない。神靈に對する敬虔な態度、長上や、同輩や、幼年者などに對する態度、食事の作法や、接客の心得、事物取扱の態度、時間や一般の起居の上の規律など、多くは躾けとして習慣となるやうに錬成されねばならない。此の實踐的な躾は子女の實踐的性格を作る基礎工事である。而も我々は何事につけても至誠心を以て當らねばならないが、至誠心の一大特徴は自發的な態度を執りながら滅私奉公、捨我奉仕の實踐實行に努力することである。自發的に自ら進んで正しい事を實踐せんとする自奮自發の習慣としての躾けは嚮がては創造的な企畫的な實踐的性格の錬成にも資する所があるのみではなく、進んで奉仕するといふ積極性を涵養することになる。母國を離れて勇敢に雄飛し奮闘するやうな高邁の氣象をも育成するに至るものである。一般に自ら規律ある生活は科學的な精神の錬成にも資することが出來る。これ等は興亞大業達成の精神力として重視されねばならない。

殊に子供は日夕接する所の母親から自然に大きな感化を受ける。敬虔、信順、感謝、敬愛、獻身の精神など多くは母親からの感化の賜物である。子供は母が信じ、敬愛し感謝する人に對しては矢張これを信じ敬愛し、これに感謝の心持を捧げる。子供は母親が輕視するものを輕視

し、母親が憎むものを憎むやうになる。而も母親が其の子供の爲めに自發的に自己を捨て、獻身的奉仕をなす所の崇高慈愛の親心が凡べての感化の基本であり、これにより母と子が一體となるのであるから、母親の行爲は卽ち子供の行爲となるのである。殊に母親の捨我奉仕的な親心其のものが子供に自然に體得され、子供自ら捨我奉仕的の性格に育だて上げられ、軈がては國家の爲めに滅私奉公の誠を致す所の國民となるのである。

母性の斯樣な態度には實に感謝すべきである。併し子供を躾けて行く細かな點について考へて見ると、決して容易なことではない。ともすると却つて滅私奉公の精神に反くやうな躾をさへすることがある。大都市の電車内に於て、幼少の子供は多くは、乘車するや否や、座席に飛び上つて窓外を眺めようとする。泥靴や下駄を乘客の前に投げ出して平氣である。履物を取る親は實に少數で、多くは其の儘に放任してある。稍公德を重んずる人は子供の足を自分の方に引き寄せて、隣席の乘客に迷惑をかけまいとする。蓋し窓外を眺めようとするのは子供の自然の興味である。此の興味を濫りに抑壓することも如何であるかと思ふが、併し、四五歳にもなれば色々の躾が必要であり、又可能である。食事の際には食事上の作法にも注意する。箸や茶碗の持ち方や、飯粒を散亂しないやうに躾をすることが普通である。朝起きれば顏を洗ふ躾けもするのである。電車に乘つたら電車に乘り方の躾けをすることも必要で、又可能である。交通機關としての電車の座席には正しく腰をかくべきである。若し窓外を眺めようとするならば、子供自らをして履物を取らすべきである。子供が出來なければ、付添の親が此を取つてやるべきである。履物を其の儘に乘客の前に投

げ出して恣に窓外を眺め自分の興味を滿足させようとする態度は一種の自我功利の態度であつて、滅私奉公の精神から見れば之れに反いた躾け方であると言はねばならない。

八紘一宇の理想を實現する一つの方法としては、一宇の中に八紘があることを自覺しなければならない。我々が指導し提携し協力せねばならぬ大東亞共榮圈内の人々は常に日本の大都市を往來して居るのである。デパートの食堂にも、電車やバスの中にも、常に八紘的世界が展開されて居り、我々の行動は此等の人々に注目されて居るのである。自分達の子供を躾けて行くのに人の迷惑を顧みないやうな態度は八紘を一大家族のやうにする新秩序建設の努力に對してまことに不似合の態度ではあるまいか。是に於て我々は兩親の再教育殊に子女の躾けに關し、母親の再教育の必要を感せざるを得ない。根本的には將來の父となり母となる所の國民教育、殊に女子の教育に對して多大の關心を起さざるを得ないのである。

女子の教育に於ては身體の健康が第一であり、心身一如の教育に最も重點が置かれねばならない。日本の國策上人口の增加が必要であり生れた者を立派に育だて上げることが一層大切である。女學校の教育は教養豐かに情操の醇化が大に必要である。而も家事家政育兒本位にならねばなるまい。女學校には幼稚園又は託兒所などが附設され、育兒保育の實際について、精神的に、科學的に研究を進め、實際に育兒保育の練習をなして相當に體驗することが必要である。殊に女子の精神教育に於ては、國體信仰といふ敬虔の精神が男子と同樣に根本でなければならぬが、教養豐かに外柔内剛の氣象を養ふことに一層の力が注がれねばならない。家庭の母親としても内面には男性的の強

いものが必要である。直接の國防に於ても女子の力に俟つものが多く、銃後の家庭を護り、第一線の勇士に後顧の憂なからしむるにも、女性の豐かな強い力に俟つものが頗る多いのである。松陰先生は女訓に於て、柔順幽閑、清苦儉素の教のみでは不十分であるから、節烈果斷の女性を養ふべしと戒めて居られる。凡べての女性は烈女節婦とまでなり得ないとしても、少くも豐かな情操の陶冶と強固な意志の鍛錬が必要である。更に知能の方面に於ても、徒らなる物知りではなく、明確な知能、確實な判斷力が望ましい。これは獨り家庭の母として望ましいのみではなく、科學的や經濟的に家庭生活を合理化せねばならぬ家庭の主婦としての教養にも必要であり、又大東亞共榮圏の女性を指導しこれと協力する上にも必要な資質であると信ずるのである。

本稿起稿に當り、偶〻青山師範の草場弘兄來遊、種々有益なる教を受くることが出來たのである。こゝに厚く感謝の意を表する。

敬・愛・信の新體制

新體制運動の實績を擧ぐる爲には、我々は私欲私心を克服し、全體の爲に自發的に自ら進んで捨我奉仕をするといふ至誠眞實の精神を發揮せねばならない。

本居宣長先生の說いて居られるやうに、神は天地といふ大きな器物を使用して、萬物を化育し、其の生成發展に盡くし給ふので、此の聖業は實に惟神の大道の顯現であり、この中に至大至公純眞なる大至誠大眞實を拜することが出來る。我々の捨我奉仕的なる至誠眞實の心は實に此の神性の素質を惠まれて居る日本人本來の本性であり、我々の日夜修練を積まねばならない貴い賜物であるのである。

私は此の至誠眞實心が具體的に現はれる基本の姿として敬・愛・信の

三つを認めざるを得ないのである。これまで日本の國威が世界に輝くに至つたのは此の敬・愛・信の力によることが多いのであるが、今や國民の新體制が組織されんとして居る時に當り、我々は益々此の日本人本來の本性を發揮し、神慮奉行に力めねばならないのである。而も此の實踐實行は日常の生活の色々の方面に於て立派な習慣となるまでに修練されねばならない。徒らに大言壯語するよりも手近なことから此の精神を實行する所に新體制の機能を發揮する實力が養はれるのである。

敬神崇祖、報本反始、忠を第一義とする忠孝一本の實踐實行は大家族制の日本に於ける崇高なる中心精神であるが、此の中には立派な敬の精神が、義といふ實行となり、敬義一元として働いて居るのである。私はこの敬の精神が、社會各般の生活に於てモツト〳〵發揮され修練さ

れねばならないと思ふのである。例へば、電車の中でも汽車の中でも、此の精神が美しく發揮されるならば、こゝに公衆道德が立派になり、社會の品位も高まり、外來の人も自然に敬意を拂ふやうになる。人込みの電車やバスの中で、子供に窓外を眺めさせる爲めに、子供の泥靴の裏を乘客の前に投げ出ださせて平氣で居る親達は乘客に對しての敬の精神を養ふべき良い機會を逸するものである。又交通機關としての電車やバスを遊覽バスのやうに思はしめ、子供の躾に於て個人主義的な氣儘な氣持を養成するもので、新體制の生活に反するやうに子供を躾けて居るものである。又電車やバスの中で、自分の肩幅よりも廣く兩膝をひろげて無作法な乘り方をするのも自我的氣儘の現はれであり、敬の心の缺けて居ることを現はす場合が多い。我々は日常生活に於て、電車やバスの乘り方のみについて見ても敬の態度の修練を積まねばならぬ機會が相當に多いのである。

愛は愛育、愛護、慈愛、慈悲などといふ愛であつて、萬物の發育發展に必要な精神力である。大家族制の日本に於ては、他の國に於けるよりも此の精神は大に現はれて居らねばならない。親子の間の愛は純なるものであり、親子本位、祖孫一體の日本に於ては此の純眞なる愛が世界に於て最も美しく發揮されねばならない。而も日本の國民には祖先以來の神性が惠まれ、萬民は畏くも皆　陛下の赤子である。故に我々は自分の子に對しても、此を粗末にせず、國の爲めに立派に盡くすやうに敎育せねばならない。子に對しても一種の敬の氣持をもつものである。我々は神國日本に對しては此を敬すべきである。西洋流の愛は實に敬愛であり、愛敬である。人々が我を忘れて功利をはなれて

其の仕事に沒頭するのは仕事を愛する姿であるが、我々は日本の國民として仕事をなして居るのである。國に對する奉仕の精神が根本である。此の故に、仕事に對して此を粗末にしてはならないといふ敬の態度をもつべきである。

國體に對する强固なる信念は我々の凡べての思想や行爲の源泉である。此の信念がなければ日本人ではないのである。新體制に於ては、此の信念が中心の大精神であり、我々は益〻此の信念に基づいて生活の刷新を力めねばならない。義勇奉公、公益優先、捨我奉仕の行を勇敢に果たし、萬難を克服して皇運扶翼に力むることは此の信念に基づく純眞至誠の精神である。

一般の社會生活に於ても、自我功利の念の强いものは人から信せられない。我々は自我功利の念から脫却して、互に信じ、信じられ、協力和親の實を擧げねばならない。約束の履行、商取引の眞實さ、時間の勵行、言行一致、言心一致、國民の生活が至正明達明朗にならねばならない。殊に又各自の實生活に於ては、各自の仕事に對する信念が大切であるが、これとても個人的のものではなく、國運進展に寄與すべき國家的信念に生きねばならぬのである。

國家の各般の事業は至誠眞實——敬・愛・信の力によりて進められ、社會の生活もこれによつて刷新される。新體制の新組織の活動も此の精神に基づかざれば其の實際上の能率を擧ぐることは出來ない。固より實際上の能率を擧ぐるには外面の設備施設も大に關係がある。例へば、日本は都會でも、地方でも、訪ねようとする人の家を見出だすことは容易ではない。此のために全國で浪費する時間や精力は實に大きなものである。仕事の敏活さを阻害し、能率を低下させることが夥

だしいのである。私は戸籍番地の外に住宅番號なるものを新に創設し、各戸が一目瞭然たるやうに、各戸に直徑五六寸の大きな番號標札を掲げしめ、町の辻々、角々には、丁度伯林の新市街に於て見るやうな各辻から各辻迄の間の番號標示板を設くることにしたいと思ふ。併し外面の設備施設には時間を要する。又物によりては經費の必要もある。

新體制の生活は目前に迫つて居る。我々は施設の不便を忍び、新體制生活の基本となるべき精神の實踐修練に力めたいものである。日本の生活や文化は觀念的のものではない。實に體驗的であり、實踐實行の生活や文化であらねばならない。

日本は實踐の國である。日本の歴史の本質は惟神の大道の具現であり、實に神聖なる實踐生活である。家族の生活は理論の生活にあらずして實踐の生活である。大家族制の日本、祖孫一體の日本は此點から見ても實踐生活であらねばならない。日本に於ては理論は遊戯のためではない。客觀化して眺めるためでもない。夫れは全く實踐へ移すためのものである。實踐が目的で理論は方法である。我々の生活も我々の文化も皆此の實踐といふ點に於て日本的特徴を有するものである。

社會事業の基本精神

社會事業の基本精神は親心である。親心は至誠眞實の心は、其の自然の姿に於ては、家族の間に現はれのである。至誠眞實の心は、其の自然の姿に於ては、家族の間に現はれるものである。親子、夫婦、兄弟、姉妹の間に自然に現はれるものであるが、夫婦は互に相求むる所のものもあり、兄弟、姉妹の間には其の境遇の如何によつて動もすれば羨望などの不純な心が起ることもある。併し親と子との間に於ては、全く純粹の心持が溢れて居る。子は偏へに親の幸福を願ひ、親は自分の生命を捨てても子の爲に奉仕することを樂むものである。人は子心と親心との兩方をもつものであるが。兩方共純粹の至誠眞實である。我が國は一大家族的國家であり、而も夫れは親子本位で、祖孫一體である。獨逸のテンニイスは社會を利益社會と協同社會とに分ち、家族の生活は協同社會の模範型であると說いて居り、我國に於ても從來社會を此の二つに分けて說く人が多かつたのである。併しテンニイスの說く所の家族といふのは西洋の夫婦本位の一代限りの家庭生活を指すものであつて、我が國の如き永遠からの無限の家族を指すものではない。

永遠に亙る親子本位の祖孫一體の西洋の家庭生活が協同社會の模範型であるならば、我が國の家族生活は如何なる社會に屬すべきであるか、これは實に協同社會以上のものである。祖孫一體の社會である。億兆一心の社會である。これは日本以外に他に類のないものであるから日本的社會と稱することが最も適切であると思ふ。我が國に於ては、國家が主體であつて、其の中に社會生活があり、其の社會生活には、日本的社會を中心となし、協同社會や、利益社會もあるのである。而も此の協同社會も、利益社會も皆日本

的社會の祖孫一體、親心子心の一元的一體的社會の精神に基づくことを要するものであつて、然らざるものは日本の社會として成立することが許されないのである。利益社會の如きは、利益を目的とするにしても、單に其の社會に屬する成員の利益を本位とするものであつてはならない。日本的社會の精神としての親心的な至誠眞實の精神に基づき、國家全體の利益を優先的に考へねばならない。協同的に或る社會の福祉を增進すべき協同社會に於ても國家全體としての福祉增進を基本精神となさねばならない。

至誠眞實の精神については、中庸などに於ても、天の如く高明、地の如く博厚、而も其の作用は悠久悠遠であるとか、至誠は神の如しとか、色々な言葉で此を說明しようと力めて居る。二宮尊德翁は神の如しではなく、神其のものであると說いて居るが、實は大至誠大眞實は神の本質であると見てよいかと思ふ。山鹿素行先生に至つては、誠は一身一家にこれを行ひ、尙廣く天下にこれを行ひ、古今を通じて行はれ、至大至公、至正明達天下の情已むを得ざるの極であると論じて居る。誠は實に正しいことをどうしても實行せずには居れない已むに已まれぬ自發心である。親は子の不幸を默視することが出來ない。自ら進んで自發的に此を助けようと力むる。單に觀念のみでは誠とは言はれない。誠は正しいことを實踐することに力むるものである。人から强へられ又は注意されることを待たずに、自ら進んで努力する働きである。滅私奉公、捨我奉仕を自發的に實踐することを力むるものである。尊德翁は我が道は至誠と實行とのみである。縱令智謀孔明を欺き、辯舌蘇張を欺くと雖も、辯舌を振つて草木を榮えしむることは出來ざるべし。……と諭して居る。瓜や茄子の前に立つていくら能辯を振つても

野菜は育たない。これを培ふといふ實行實踐が必要である。至誠と實行とは二つではない。眞實の至誠には必ず實行への努力が伴ふものである。

日本は一大家族國家であり、親子本位の祖孫一體の國柄であり、眞正純粹の至誠眞實心が發揮されねばならない國柄である。至誠は必ず自發的に實行實踐へと努力せずに居れぬものである。日本の國民は長所の一つとして實行實踐的であるといふことは、實に眞の至誠に充ちた國柄に起因して居るのである。日本の歴史の本質は單なる事實ではなく、惟神の大道の具現である。神聖なる實行實踐の歴史である。西洋の哲學者の中には規範は單なる出來事や事實から生じて來ないといふ一派があるが、此の論は日本には當てはまらない。我々日本國民の行爲の規範は實に日本の歴史的事實に基づくのである。道の具現としての日本の歴史的事實は實に我々國民の行爲を規定する力であり、將來の日本の使命を產み、使命達成の實踐力を產むものである。

私は至誠眞實の精神が具體的に現はれる場合には、少くとも敬・愛・信といふ三つの基本的な姿に於て現はれるものと信じて居る。

敬は支那の朱子などは主一無適などゝいふ意味にも解し、大に其の重大性を論述して居る。我が國に於ては易に說かれて居る所の敬以直內、義以方外といふ意味を一元的に考へ、實行實踐的に義の姿として現はれることを力むるものが敬であるといふやうに、敬義一元的實踐に重きが置かれた。山崎闇齋先生の如きは自分の字をも敬義と名付けたる程敬の實踐的方面を重視したのである。斯くして敬は日本に於ては大義の爲に身命をも惜まざる節義や節操、忠誠奉公といふ日本精神を發揮したのである。

愛は愛育、愛撫、愛護、慈悲、慈愛、愛好などの愛である。

眞の愛は相對的な價値の爲に愛するのではない。親は其の子が將來立派な價値のある人になるから此を愛するのではない。不具な子供などに對しては不憫な情も加はり、却つて可愛がるものである。親は子は自分の子であるが爲に愛さゞるを得ないのである。已むを得ざる誠の現はれである。愛は實に萬物の生長發展の力である。

併し日本に於ては我が子は勿論、陛下の赤子である。故に我が子であるからというて此を粗末に取り扱ふことは出來ない。益〻立派に教養を施し忠良の國民となさねばならない。これが親が子に對する或る意味の敬的態度である。神國日本に對しても唯だ單純に愛國だけではなく嚴密に言はゞ神國である日本に對しては此を敬し且つ愛すべきである。自然を愛すると言ふ場合でも單に之れに親むのみではない。神から生れたる此の自然は神性をもつて居るから、これに對して此を敬し又愛すべきである。

信は至誠眞實心が具體的に現はれ來たる最も基本的な姿である。信には守るといふ意味がある。眞に守る場合には此を益〻立派にせねばならない。人間の本性殊に日本國民に最も純粹に現はれる筈の誠其のものを守り、親心子心を守り、益〻此を立派にすることが、大切なる信の作用である。

信の形態については色々ある。人間相互の間に、また人間の絶對者との間に現はれる所の詐りなき眞實の姿としての信もある。人間と事物との關係を緊密ならしむる精神力としての信もある。殊に信は實に內外の秩序をつけ、正しい力强い實行の力となるものである。我が國に於ては國體に關する信念信仰が國民の凡べての行爲の根源で

あるべきである。至誠眞實の純粹なる現はれとして親心も此の中に生れ來たるものである。

日本に於ける社會事業の基本精神は實に此の親心である。至誠眞實の心である。敬・愛・信の作用である。元來は外部より强へられて起るものではない。自發的に進んで行はずに居れないものである。神を祖先とする日本の國民には神性的至誠の素質が惠まれて居る。我々は我々の同胞を一人でも粗末にしてはならない。私は永い間教育界に世話になつて居つたのであるが、日本の教育には西洋と異り、大家族的の親心といふものが旺盛でなければならない筈である。一人の生徒でも粗末に棄ててはならないものである。然るに例へば青年が何にか校則に反くことを行へば、其の行爲如何によりては此を退校處分にすることが少くはない。退校されたものは何處に行くのであらうか。私立學校に入るものもある。私は曾て或る期間の間私立學校に關係して居つたことがあるが、相當多數の被退校者を救濟した。公立學校から捨てられた青年は私立學校に拾ひ上げられて相當の人物となつて居る。私立學校は一種の救濟病院のやうなものである。社會事業を行つて居るのである。

教育者が日本の家族主義的な親心に徹すれば、青年を濫りに捨てることは出來ない筈である。自分の學校に於て教育することが出來ないならば、他の學校に依頼すべきである。依頼されたる學校に於ては氣持よく此を拾ひ上げて教育してやるべきである。殊に破廉恥の行爲などが他の生徒の間にも知れ亙る時は本人の面目上寧ろ他校に轉せしめて新に教育を受けさせる方が結果がよいと思ふ。併し從來は轉學を頼まれた方の公立學校は多くは此を斷つて轉入學を許さない

のである。これは全く家族的な日本の教育としての親心の十分でないことを示すものである。そこで私立學校は社會事業的の役目を果たすといふことにもなるのである。

一億一心皇運を扶翼し奉るべきが我々の務めである。殊に時局以來各方面に於て人的資源を要することが切である。一人でも粗末に取り扱はれてはならない。各人夫れ夫れ其の分に應じて能率を發揮せねばならない。至誠眞實―敬愛信の精神は社會事業の基本精神であり、親心は實に其の根本の精神である。新體制は私心功利の念を克服して全體の爲に努力すべきことを要請するが之れ又至誠眞實の精神を基本とせねばならない。今後の社會事業は更に一層此の點に留意し其の振興を見たいものである。

山鹿素行の精神

興亞大國民の教養

一、大國民の資質としての誠

山鹿素行は幼にして林羅山に師事した。羅山は程朱學の研究者として名高いが、其の學は和漢兩方に通じ、神道についても研究する所があり、內外清淨、敬の精神を體得し敬虔な人であつた。

素行は初めは程朱の學を修め、後老莊等をも研究したが程朱の方面に於ては、朱子學の理と氣との二元論に反對して、理氣妙合の一元論を主張し、朱子學に對して古學を唱道した。併し何時までも支那の學問に沒頭することは出來なかつた。例へば其の「中朝事實」に於て見られるやうに、日本の肇國の精神を明にし、國體の尊嚴を說き、皇國文化の本源について研究する所があつたのである。

朱子の小學は支那の子弟の爲に書かれたものである。日本の靑少年には日本的小學が必見であると信じ、武敎小學を著はされ、吉田松陰の如きは、先生を先師として尊敬し其の武敎小學について、研究を積み、武敎講錄の著となつたのである。

日本人の大國民としての資質は國體の精神に基づかねばならない。先生は三種の神器について、玉は以て溫仁の德を表はす可し、鏡は以て致格(致知格物)の知を表はす可し、劍は以て決斷の勇を表はす可し、其の象る所、その形はす所、皆天神の至誠なりと說いて居られる。而して先生は、三器は天神の功器、三德の全備なり、聖主此を用ゐて、內は其の容心を鑒み給ひ、外は其の治敎を制したまふと述べられて居る。我々は天皇の大御心を體し、肇國の精神に基づき、國家の治敎の下に修練を積み敎養を深めねばならない。知能の鍊磨は大に必要であるが、仁愛の精

神にも富み勇武の氣象に優れねばならない。全人的全人格的な豐かな、正しい、強い至誠心を顯現せねばならない。

先生の考では誠といふものは天地の道であり、天地の道は至誠のみである。理氣相合するときは、卽ち交感して妙用の性あり、凡そ天下の間象あれば、乃ち此性あり、此象の生ずる、已むことを得ざればなり。象あれば、乃ち已むことを得ざるの性あり。性あれば乃ち已むことを得ざるの情意あり。情意あれば乃ち已むことを得ざるの道あり。此道あれば乃ち已むことを得ざるの教あり。天地の道は至誠のみと說かれて居る。そして此の誠は一身一家にそれを行ひ、尙廣く天下にこれを行ひ、古今を通じて行はれ至大至公至正明達、天下の情已むを得ざるの極であるのである。朱子は誠を眞實無妄と解したが、眞實をして眞實たらしめ、無妄を無妄たらしむるものが卽ち誠といふものでこれは

實に不得已といふ心の働きである。親と子とが相親しむやうなものである。天地の道は已むを得ざるの誠を以て立つものであり、眞の誠は天地の道を實行することになる。私はこれ等の考から暗示を得、已むを得ざる誠の道の顯現としての親と子との間の最も純なる至情が日本的至誠であると信じて居る。而してそれは同時に天の道であると言つてよい。皇室を中心として、親子本位祖孫一體の一大家族國家の國民としての我々の間には眞の意味の純粹なる誠が發揮されねばならない。此の誠は國民道德の形態に於ては忠を第一義としての忠孝一本の事實として現はれ、凡べての文化は皇運扶翼の爲に發展せしめられることになるのである。斯くして我々の至誠が先生の說かれて居る天神の至誠に通ずることが出來れば、我々の大國民としての資質も崇高な輝きを示すことが出來る。

古今東西を通じてこの至大至公の大道を行ふ誠の精神には私利私欲の影はない筈である。公益を本義として私利を棄てる場合にも、心の本心から出でゝ、どうしても國家全體のために公益を本義とせずには居られないといふ已むを得ざるの働き、これこそ眞の誠の働きである。新體制を實施する場合には此のやうな大國民的の精神の修練が必要となるのである。

二、士道論と大國民の教養

更に先生の士道論は此の精神が日本の士道として現はれねばならぬといふ意味に解することが出來ると思ふ。而も先生の士道論は、我々が此を今日の時勢と照合して、擴充して味ふ場合に、興亞の大國民としての教養の上に大きな力を體得することが出來ると思ふのである。

次ぎに左の二三の點について述べて見たい。

先生は士たるものは先づ己れの職分を知らねばならぬと說いて居られる。主人を得て奉公の忠を盡くし、朋輩に交り、信を厚ふし、身の獨りを愼しみ、義を專とする。又父子兄弟夫婦の間の人倫について立派であり、農工商の人々の模範になるべきである。人倫を亂だしたるものを罰する必要もあるから文武の德が必要である。

此の意味を今日の時勢に應じて擴充して見ると、我々日本國民は國民としての使命、臣道實踐の大義を自覺せねばならない。忠を第一義として皇運扶翼に邁進すべきである。興亞の大業達成に努力すべきである。朋輩に交り信を厚ふするといふことは、今日は狹い範圍の交友のみではなく億兆一心といふ大きな意味にも考へねばならない。更に滿支の同胞は勿論、大東亞共榮圈に參加する人々は皆我々の親し

い友人であり益〻相互の信を厚ふすべきである。自己の内面修練に力め、利に走らずして義を實踐すべきは、今日は我々の日常生活に於ても最も適切に其の必要を痛感する。經濟道德が十分に發達せず、此の方面の社會生活に於ける義の實踐に於て色々遺憾な點が現はれて居る。父子兄弟夫婦間の人倫の道は固より大切で家庭家族の生活も立派にならねばならぬ。而もこれ等は皆盡く皇運扶翼の爲の忠誠の現はれとして益〻其の本義を實踐することに力めねばならない。殊に文武の兩德に至つては此を同人格の中に一元化して個人々々の臣道を實踐せねばならぬが、廣く國家的に考へると、高度國防國家の建設といふ大きな目的の爲に、國家として文教及武備の發達を圖らねばならぬことになる。國民としては兩方を人格の中に一元化せざれば大國民とは言はれない。國家としては兩方の發達を圖らざれば、大國家とは言はれないのである。

先生は更に進んで道に志ざすといふ實行方面と、其の志ざす所を勤行し努力する方面を說いて居られる。諸葛孔明の如きも單に智謀の人ではなかつた、士卒と全く苦樂を共にしたのである。楠公の如きも全く其の通りで、赤坂城に於ては時に城の四方廻五町四方を數回士卒と共に走り廻り士氣を鼓舞することに力められたといふことである。人と苦樂を共にし堅忍持久實行實踐に力のないものは大國民の資質を缺くものである。

又大丈夫たるものは常に小成に安んぜずして其の志氣氣節を高尙にすべきである。時局は我々をして八紘を一宇になすやうに努力を促がしつゝある。國民の氣節は益〻高尙にならねばならぬ時代である。大國民としては飽くまでも其の大使命の達成に邁進せねばなら

ない。

先生は更に士としては度胸と包容力が必要であることを說いて居られるが、興亞大業達成の爲には度胸のすわつた迫力ある實行實踐が必要であり、大きな寬大な包容力もなければならない。我々は昔から色々の外來思想を醇化し、他の民族を包容し同化して立派な日本人として居る。此點に於て大國民としての資質を發揮して來て居るのであるが將來は益〻此の點に修練を積む必要がある。

殊に先生は溫藉、風度といふことについて說かれて居るが、大國民の襟度風格の上に極めて適切な敎である。

溫藉といふことは含蓄包容あるの意也。內に德をふくみ光をつゝみて、外に圭角あらはれざるのことなり。小智短才なる輩は器せばきを以て、我知を立て人にほこり世にてらふ。度量氣象よく萬物の上に卓爾たるが故に、更に功を立て名にほこる所あらず、而して更に忿勵の氣あらず、溫和自ら顏色に發し、仁人君子のすがたあらはれ、物に交り人に友なふときは、陽春の麗かにして能く物を利するが如くなるべし。是大丈夫の溫藉なり、溫藉ある時は能く惠愛して人を救ひ物を助け天下の困究離析するを見ては、我身の苦あるが如くす、故に倉廩を開き櫃を倒にし、寶を出だし財を傾けて其の救を全くして爰に於て快とす、是溫藉の致す所なり……」

溫藉ある人は實に所謂有德の人で、其の修練も容易ではないが、先生も言つて居られるやうに、度量寬に氣節大なる時は卽ち此のやうな德風が出來て來るものである。大東亞共榮圈の同胞などに對しては此の德風が殊に必要であり此のやうな大國民としての風貌の前には自然に敬意が拂はれるであらう。而も國家的に考うるならば、今日我々

の國家は實に聖戰を戰つて居るのであるが、これは國家としての温藉の大精神を發揮して居るものである。

更に先生の所謂風度といふものは、唯剛強なるを專らとして、衣服、飲食、居宅の體、言語動容に至るまで、專らすねこはりて、木のはしの如く取りまはすのではない。又これとは反對に、婉にやさしく、朧たけたらんは柔弱に溺れて風度と言ふことは出來ない。少しもつたなくいやしき質がなく、水精の瓶に秋水をたくはへ、白玉の盃に氷をのせたやうに、聊かもかくれたる所なき風情こそ大丈夫の風度といふべきであると說かれて居る。

私は、風度は高明な天の德であり、温藉は博愛慈愛的な地の德であるやうに思ふ。此の兩者を一身に備へたる所に大丈夫の德風が立派になるので、東亞の指導者たるべき大國民の敎養として味ふべきことであると思ふ。

又一面には地の水の樣に冷靜に致知格物的に事物の眞理を究明し、他面に於ては天の光や熱のやうに、熱心熱情を以て事に當るといふことが大國民としての味のある資質であると思ふ。一見反對するやうなものを融合一元化して人格の中に備へ居る人の中に色々の人物を見ることが出來る。南洲翁の如きは一面素朴質實で細事に無頓着のやうであるが、鹿兒島では庭前の掃除は自分の受持で、而も竹の箒で奇麗にはきめを立てられ、來客が履物で其のはきめをつぶす場合には、客を送り出して後、再び竹箒ではきめを作られたといふことである。殊に又翁は剛氣と仁愛の兩性を備へて居られたことも人の知る所である。我が皇軍の武力は世界無敵であるが、勇猛果敢の中に慈愛深き人情味を發揮し、我々をして泣かしむるやうな無數の美談を殘して居る。

實に大國民としての皇軍であると思ふ。

最後に一言したいことは、先生は實に實踐の人であつた。其の說かれる所のものは、單に客觀的の觀念ではなくして、自分の實踐實行其のものゝやうに思はれるのである。表向きは朱子學に反對せる爲めといふので赤穗に謫居を命せられたが、其の際北條安房守の屋敷へ出頭する間際に於ける先生の態度は實に人も知る如く、敬服に堪へないものがある。安房守から相尋ぬべき御用があるから早々自分の私宅へ參るべしとの手紙を受取り、これは容易ならぬ出來事であると感じ、立ちながら遺書數通を認められ、又若し死罪に問はれた場合には公儀へ一通提出する積りにて別に一通を認められ、途中は宗三寺に立寄り、祖先の墓に詣で又翌日は津輕公を訪ぬる約束ありしも、これを門前にて斷り、悠然として安房守の屋敷に行かれたのである。死罪に問はれる場合には公儀へ提出せんとして立ちながら咄嗟の間に認めたものは、其の內容、其の文章共に非常な名文であるが、而も先生は、此文は立ちながら認めて點をつけたものであるが、其の以後、今日取り出だして見るに、急なことであつたから、不十分のものである。併し恐れながら日本大小の神祇、一字も後に改め候事は無之、誠に我等辭世の一句にて候と言はれて居る。愈〻赤穗へ謫居を命せられた際に、自宅に何にか用向あらば傳へてやるといふことであつたが、先生は平素家を出づる場合には二度家に歸らぬ覺悟にて用意して居られるので、跡に心に殘り候事は無之樣に勤めて居るから、家へ對し今更書き置き申すべき事は無御座候といふ實に立派な態度であつた。

大國民として敬はれるには、知能に於ても大に優れて居らねばならない。興亞の大業達成には科學や、夫れを應用せる技能の振興が大に

必要である。併し學藝技術は全人格よりの結果であらねばならない。正しい、豊かな、深い教養の全人格の作用として、現はれる文化であらねばならない。大國民としての教養なくしては大なる知能の發達も覺束ないのである。

中根東里先生とペスタロッチー

ペスタロッチーは世界に於ける獨自の存在であつて、ペスタロッチー以外にはペスタロッチーは居らないのであるが、其の思想、心情、業績等に於て多少なりともペスタロッチーに類する人は相當に存在して居ると思ふ。日本に於て德川時代に之を求むるならば陽明學者の中根東里先生の如きは其の一人であらう。

先生は元祿七年伊豆の下田に生れ明和二年卽ち今から百六十六年前に年七十二歲で亡くなつて居る。ペスタロッチーのやうに幼少にして父を喪ひ、寺に入つて僧となつたのである。京都の宇治の黃檗山で修行したこともあつた。後江戸に出て、物徂徠や室鳩巢などに就いて學んだが、遂に陽明の學に安住の境地を見出した。

富貴名利は先生に取つては浮雲のやうなもので一向に執着がない。曾て鎌倉の鶴岡廟側で弟の叔德と共に木履を賣つて生活をして居つた。固より立派な下駄屋ではない。少し許りの下駄を軒先にぶら下げて居つたであらう。これで其の日〳〵をどうかかうか食ふや食はずに過ごして居つたのであるが、偶ま同居して居つた貧乏人が病氣にかゝつて藥を買ふ金もないのである。先生はこれを見かねて自分の書物や衣服を盡く賣り拂つて藥を求めてやつたのである。ペスタロッチーも人間愛に富んで居つたが、自分の書物や衣服を賣り拂つてまで人に施こしたといふことは聽いたことはない。東里先生は實にペスタロッチーも及び得ざる程人間愛的同情心の厚かつた人である。

其の後江戸に出て辨慶橋附近に住み綿糸や縫針などを行商し、又竹の皮の草履などを賣りて漸く口を糊して居つたが、人は先生を皮履先

生などゝ呼んでゐた。そして書を講じて居つたが、餘りに高潔清苦なので人は先生を憚り、弟子も少なかつた。從つて貧乏であつたのである。斯かる際に人の勸めにより陽明全書を讀んだ。先生は初めこれを侮り、寢轉んでこれを讀んだが、致知格物知行合一の說を見るに至り俄かに端坐容を改めて、孔門傳授の心法盡く此の書に在り、何んぞこれを讀むの晩かりしやと叫び、これより王學に入つたのである。

さて日本の教育家に是非一度讀んで貰ひたいのは先生の「新瓦」といふ書物である。これは日本倫理彙編卷の二の中にもあり、又和本としての「東里遺稿」の中に出て居る。次にこの新瓦について一言し、其の中にある先生の教育意見の一端を述べて見たい。

先生の弟叔德は先生同樣貧乏な暮らしで、鎌倉邊に住み行商に出かけて漸く其の日を過ごして居つたが、家には妻も亡くなり、三歳になる芳子といふ娘が一人居る。行商に出かける留守の間、隣家の婆さんに芳子を賴んで世話をして貰つて居つたが、東里先生は其の實狀を聞き如何にも可愛そうでたまらなくなり、先生五十二歳の時に下毛の自分の宅に芳子を引き取り先生自らこれを養育するのである。先生は誠を盡くしてこれを愛撫し生みの子にも過ぐるといふ懇切さであつた。而も先生自らの懺悔は實に涙ぐましいものである。今春以來御前芳子は自分を親しんで父のやうに思つて居るやうである。併し自分はどうも未だ御前を我が子のやうに愛しては居らない。實に耻かしいことである。どうしてこの事が分るかといふに、御前は御前の父と寢る場合には夜寒く寢具が薄くても御前は曾て泣いたことはない。然るに自分と一緒に寢るやうになり、寢具が暖いのに御前は泣くのである、これは畢竟御前の父と自分との寢方の相違からである。御前の父

であつても寢具の中で自分の氣持に適するやうに輾轉反側身體を動かして見たいことであらうが、若しさうすれば御前を動かし目をさまさせることを恐れ、じつとして靜かに寢て居り、御前が身體を動かすのを待つて始めて、父も其の身體を動かすといふ注意深さであるから、御前は能く睡りて泣かないのである。然るに自分はかつて身體を動かすまいとしても辛抱が出來ず、遂に御前を泣かすことになる。又御前の父が御前を叱つても御前を憎らすまでに至らないが、自分が叱ると御前を憎らすやうである。これ等のことから見ると自分はどうも未だ御前を我が子として養育する情愛が薄いやうで實に恥づかしいことである。

先生の芳子に對する切々の思は實に涙ぐましいもので、人の子に對する親心の至情其のものである。

ペスタロッチーはイヴエルドンの學園に於て、六十二歳の時正月元旦に棺桶を前に置いて職員及生徒に講演したことは名高いものであるが、其の中でペスタロッチーは自分は學園の子供達に對して親心を體驗出來ないやうになつたと慨嘆して居る。二十人か三十人の生徒の時代には一々各の生徒に對し世話も行き屆き自分は各々の子供の親であるといふ體驗もあつたが、今や學園は百三十七人といふ多くの子供になつたので、仲々自分の世話も屆き兼ね、各の子供に對して自分は親であるといふ感じがもてなくなつたと殘念がつて居るペスタロッチーの心情と東里先生の心情とは實に相類するものがあるではなからうか。而も他人はいくら人の子を愛しても寢方に於て眞の親とは違ふといふ東里先生の體驗にはペスタロッチーも及ぶものではない。

東里先生は斯様に幼姪芳子を世話したのであるが、芳子はまだ幼いので誨ゆる譯にも行かず、自分も段々年をとるといふので、新瓦と題して、芳子自身の境遇や實例を擧げての教訓などを書き綴り、其の端しに鳥獸の繪などを描き芳子の爲に殘し置いたのである。

先生はこの新瓦に於て、芳子が鎌倉で世話になつて居つた隣の婆さんが父叔德の前では如何にも芳子を可愛がるやうに見せかけてゐたが叔德が行商に出かけた後は厄介な赤ン坊を賴まれ迷惑至極といふので三歳の乳兒芳子を虐待したといふことを述べて居るのである。婆さんが芳子を虐待したといふ一つの證據として次のやうなことが說かれてある。

元來嬰兒を愛するものは事物の名を赤ン坊に教ふる場合には、抽象的な名稱を言はずして、事物の貌や其の聲などを教へてこれを開喩すべきものである。又はこれを重言するものである。例へば手を手と言はずして手手（テテ）と重言して教へ、寢を寢寢（ネンネ）と言ひ、起を起起（オキオキ）、食を甘甘（ウマウマ）と言ふものである。鼓をツヅミと教へずして塡塡（テンテン）と言ふのは其の聲で教へるのである。犬をイヌと言はずして其の吠へる聲でワンワンと教へる。猫をニヤーニヤーと言つて教へるのも此の類である。尿を津（シィ）と言つて教へるのは出る姿を重言するのである。然るに今芳子の言葉を聞くとこれ等の子供の言語を言はずして、小便の時は小便と言ひ津々と言はない。凡べて大人の言ふ言葉を使用するのである。これは畢竟隣の婆さんは芳子を厄介視して取り扱い、子供らしい愛語を使用せずに凡べて大人の言葉で教へて居つたから芳子は子供らしい愛語を使用しないのである。つまり婆さんが芳子を虐待した一つの證據であるのである。

ストーナーの早教育論などでは幼兒らしい愛語を教へずして初めから大人の使用する正しい言語を教へよといふ説も出て居るが、これは自然を無視する意見である。親心の自然の發露としての意味ある教育法を破壞するものである。犬をイヌと教へないで、ワンワンと教ふることは犬の聲によりて直觀的に教ふるのである。尿を津津といふことは其の姿の直觀によりて教ふるのである。幼兒を愛するものは自然に斯樣な子供らしい直觀的な言葉で事物を教ふるやうになるもので、これは已むに已まれぬ親心の自然必然の發現である。

ペスタロッチーが母の書などに於て子供の身體の色々の部分を直觀的に教へることを主張したのも全く親心の自然である。

ペスタロッチーが何故に斯く迄教育其のものを愛したか、これは祖國を救ふためであつた。自分の仕事は神の仕事の代行であると堅く信じたからでもあつた。そして彼は實に人間其のもの、殊に子供其のものを信じ、子供其のものを敬聖に迄押し立てたのである。人は神を信ずる强烈な純な親心が彼を教育する彼の子心でもあつたのである。

ることによりて親心と子心とを修練する。子供を教育する彼の

ペスタロッチーのやうな、東里先生のやうな誠心を以て、親心を以て子供に接するならば、必然的に教育の方法等も湧いて來るものである。方法の說明は學問の力を借る必要があらうが、方法其のものは愛の誠心から湧いて來る。日露戰役で旅順で兩眼を打ち拔かれ耳を射ぬかれた重傷の一兵士が、母に逢ひたいとの一念で故郷に送られ、老母は山國から金澤の病院にかけつけたが、目も見えず耳も聞へない我が子に對して、母であることを知らしむる術もなく悶えて居つた。側の看護

婦や醫者も唯泣くのみにて名案もなかつたが、老母はフト思ひついて自分の乳房を重傷の我が子に含ませて、こゝに始めて母であることを知らしめたといふ母性愛には何人も泣かされる。（村上寛氏母ごころ）立派な教育法を案出したいならば先づ親心を培ふことである。

東里先生とペスタロッチー、兩者は其の性格に於て其の事業、其の思想に於て、經歴に於て、互に大に異る所があるのであるが、名利を超越せる點、貧しきものに對する厚い同情、子供を愛する點などに於て頗る相類するものがあり、而も東里先生に於てペスタロッチーの及び得ざる切々なるものが見出だされる。殊に東里先生の大人歌や一體之訓に現はれて居る所の天地萬物一體觀の哲學思想は仁愛の哲學と言つてもよいのである。ペスタロッチーの人間救濟の事業も彼の意味での仁愛の實行であつたのである。私は强いて東里先生とペスタロッチーの類似を求めようとするものではない。唯色々の點に於て相似た所もあるので、ペスタロッチーの記念の日に當り、ペスタロッチーの思想や人格、事業などを頭に浮かべながら、東里先生の新兎や大人歌、一體之訓などを讀まれるならば味深きことであらうと思ふのである。

觀音詣で

私は東北の米澤で生れ、十一歳から會津で育つたのであるが、米澤にゐる間は、子供の時から、郊外一里ばかりの山手に祀つてある觀音樣に必ず年に一度は參詣したものである。

毎年雪が降るころで、相當な惡路であるが、雪と戲れる子供の氣分で、愉快な敬虔の氣持で參詣を終り、歸り路には出世の象徵といはれてゐる素朴な木彫の鷹を買ひ、あべかは餅などを食べたもので、その日の祭には、非常な人出であつたと記憶してゐる。數年前、昔なつかしさに、久しぶりにてこの觀音樣に詣でたのであるが、今では參詣人も少く、幼い時に見たやうな立派な餅屋などは一軒も見當らない。全く荒涼たる寒村となつてゐるのに驚いた。

觀音樣の世界にもかくも盛衰があるものかと心淋しくさへ感じた。しかし私には觀音樣の御りやくには少しも變るところがないと思はれてならない。二歲ばかりの乳呑兒であつた時に、母と共に深い川の中に沈んでしまふべき運命であつた我々親子は、全く觀音樣の御手によりて助けられたのである、といふ母の信仰を子供ながらにそのまゝに受け取つてゐた幼い時の私の感銘は、今もなほ消え難いのである。

京都に住んでゐるころには清水の觀音樣にも度々詣でたのであるが、東京に移つてからは、時々淺草の觀音樣に參詣をする。

淺草の觀音樣の本堂の正面の上の方に、施無畏の三字の金泥の立派な額が掲げられてゐる。これは深見玄岱の筆になれるものである。玄岱は元來は支那の血統の人である。祖父は明の人で、日本に來て薩摩にしばらく住んでゐたことがある。父は長崎において通譯官を勤

め、日本に歸化して、支那姓の高といふのを深見と改めたのである。

玄岱は立派な學者であり、またその當時の書家としても第一人者であつた。豪邁な氣象の荻生徂徠でさへ玄岱の書の一幅を手に入れたいと苦心したほどである。德川吉宗將軍は玄岱を優遇して幕府の儒員となした。大日本史の編纂に大きな功勞のあつた三宅觀瀾、赤穗義人錄を書いた室鳩巢も、玄岱と同時に儒員であつたのである。

さて玄岱は觀音樣を信仰し淺草の觀音樣に施無畏の三字の額を奉納しようとして澤山の下書を試みたが會心のものが出來上らないうちに不幸にして亡くなつてしまつた。淺草寺では殘念に思ひこのことを遺族に問合せて見ると、下書が三個の長持に一杯入つてをつたといふことで、一同は非常な驚きであつた。實は下書が長持に一杯入つてをつたといふ言傳へを耳にしたが何個の長持であつたのであるかは不明なので、昨年の春に淺草寺へ赴き、貫主に御尋ねしたのである。

しかるにはからずも貫主より玄岱先生の御子孫を御紹介くだされたので、その御方に御尋ねして見ると、實に長持三個に一杯入つてをつたといふことが明かになつたのである。日本でその當時の書家として第一人者といはれる玄岱は、施無畏の三字を三個の長持に詰込まれるほど澤山の下書をなしても、なほ會心のものが出來上らないといふのでその神技を錬つてゐたのである。現在淺草の觀音樣の本堂に掲げられてある三字の額は、この澤山の下書の中から遺族によりて選び出されたものである。

佛教では施財、施法、施無畏などいふ施物が考へられてゐる。純なる心から財を施して人を助け世を救ふことは貴いことである。法を說いて人の惱みを慰むることも立派な施物である。殊に無畏の精神を

施すといふことは、その人に眞實に觀音力を施すやうなものである。我々は毫も畏るゝところがなく、心に落着きが出來、肚が据わつて何ら不安を感ぜずに勇敢に我々の爲すべきことを果すやうに努力することが望ましく、何事をするにも無畏の精神が必要である。しかしこれは財で求むることが出來ず、法を聞いたのみで體得も出來ないものである。無畏の精神を體得するには、私慾を克服して、自分の全體を公に捧げ、心身一如知行合一の姿となり、正しいことを實行實踐することを力めねばならない。觀音樣にこの無畏の精神を頂戴出來るやうに祈願しても、自ら實行實踐に力めなければ、百度千度參詣したからといつても、この精神が與へられないことは當然である。

新體制は私心功利を克服して、臣道實踐の誠を致すべきことを要求してゐる。我々は無畏の精神の體得に力め、皇運扶翼に努力するならば、新體制下の國民としての責務を果すところの力に培ふことも出來るのであらう。

國民教育の基本的研究終

昭和十七年六月十日　印刷
昭和十七年六月二十日　發行

書名	國民教育の基本的研究
定價	金壹圓八拾錢

著作者　小西重直（コニシ　シゲナオ）

發行兼印刷者　京都市上京區河原町通丸太町下ル　永澤信之助

印刷所　京都市下京區西洞院通七條南入　内外出版印刷株式會社

發行所　京都市上京區河原町通丸太町下ル　永澤金港堂
日本出版文化協會登錄第一二一〇〇一號
電話上③二三四六番
振替京都二三四三番

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

Ⅰ-5E-24